

悉く甲谷他に輸出するものにして競馬の中に一頭二千磅(日本金一萬二千圓)に價するものあり毎年夏季に至れば英國印度航海會社の船ハ航海毎に必らず之れに上下する馬數を甲谷他に輸出せり印度にハ地産の馬あれ共舁頗る小にして驅馳の用に適せずさて船に馬を積むは通常の物品を積むが如く容易ならず赤道近傍に來れば馬毛悉く落脱すれば日々の手數大方ならず飼方馬屋の如き是れ亦た頗る手數を要するものにして之を一見するも爲めに煩殺さるゝの感あり然れ共彼れオーストラ、ジャンの勇氣ハ是等の煩雜を物の數ともせず濠洲産の馬にハ時として非常の荒れ馬あり手に合はざる時は直に之を殺し器械を以て之をつり上げ海に投ずるを常とす廿二日午後船はしづ〜沖合に出でたり去らバの一語を別に早や漫々たる洋上に進めバポート、フィリップの燈臺も遂に見へずなりぬ明くれバ今はまた北太平洋を南下したる昔しの生活に立ち戻りぬ斯くて三日計り陸地を見ざりしが追々無數の小島を横に見て十餘日の後にハサーズデ

一島に立寄り電報を受取り其儘に進航したり此處ハジャバなればフィリップ群島は程遠からざるべし彼の沖合の奥にこそ近き頃吾が大和の健男兒が病没したる墳墓あらんと思へば思はず帽を脱して禮意を表せり共に甲板に立てる外人は予の舉動の異なるを怪み何事かと尋ねたればフィリップ群島遠征の明治少年菅沼氏が煙雨の中其雄骨を埋めたる來歴を話したるに何れも萬里漂泊の身とて餘處事ならず思へば彼我不覺の涙に掻き呉れぬ斯くて無事の航海廿一日を了りたれば翌日ハ大印度の沿岸を航し無難に日頃より待ちに待ちたるフーグリ河に着せり河口は頗る廣大にして天水一髮の處一箇の黒點より黒煙の青空にたなびけるは兼て畫に見たる恒河口漁船の景色に異らず河を沿ふと五哩計にして椰子芭蕉の青々たるもの民屋小船の古色を帯びたるもの天地山河闊として炎熱の爲めに苦しめらるの光景一として余が積日の鬱を散ずるの材料ハ非るハ亦し愈折れば彼れアングロインジャンが經營したる熱帶地適合の

建築物は巍然として河岸に聳へ風景絶佳なり十月廿四日午後三時滿三十  
二日の航海を了り船ハ棧橋に横はり滿船の乗客が喝采の聲と共に一同無  
事の到着を祝し午後五時暮色の至れるをも忘れ俄かに仕度して先づ岸に  
上りぬ

薄暮岸に上るや先づ予が目を驚かしたるハ熱帯地方植物の鬱蒼たる下に  
幾多の土民團欒して頗る安閑に日を消すの有様なり元來濠洲メルボルン  
府の如きは殖民地中最も新にして而も最も進歩したるものなれば人氣の  
激しきこと想像も及ばず一分間も閑談に時を移すが如きは未開人の所爲  
として擯斥すると甚だし今や此新世界中の新開地あるメルボルンより直  
に印度に來りしとなれば恰かも一躍五千年の古代に溯りたるの思ひあり  
土人は先づ予を認めて主人と呼べり先きに萬陀羅號に在りし時印度人の  
水夫等は總て乗客を呼ぶに主人の語を以てせり予一日水夫に語りて曰く  
漫りに何人に向つても主人の語を用ふるは不都合なり汝等は白人中の最

下等なる痴漢に對するも猶ほ主人の語を用へり改めざるべからずと然か  
るに今岸頭に上れば無數の土人は外人を呼ぶに主人ある語を用ゆ應接進  
退一に主人に對するの禮にあらざるはなし依りて思ふに彼れ印度人の腦  
裏には元より已れ自ら五天竺の主人たるの觀念なく比馬拉亞山下ケンシ  
ヌ河畔定まれる宿とてもあければ今日は椰子樹の下に日を送くり明日は  
亦た山羊を抱きて那處のテントに微睡まんか國亡びてより幾百年あじき  
あき浮世は假の旅に過ぎざれば白人の權下に一夜の宿を頼も同様なりと  
既に思ひ諦らめてハ我は國家の主人に非ず主人ハ千里の洋を渡り來る外  
人にこそとさてハ當國の人民一般に外人を見て主人と呼ぶの風を生じた  
るとならんと想像せしが此事後に至りて其の誤まらざるを知れりさて土  
人の親切に主人は何處に行かせ玉ふやと尋ねたれば予はカルカッタに行  
くなりと答へ此の荷物を馬車に積まそべしと命ずれば委細畏りて候去れ  
ども税關迄は馬車なけれハ持ち參るべしとて余を案内せり税關に行けば

土人恐るゝ予の前に進み荷物調査に候へば局へ御出を乞ふといへり予の荷物には怪しき物もなく税を課せらるべきものもなし再び荷物を造るが混雜なれば……是れを汝のポケットに入れよと出したる金はタツタ六ペンスありサラムサム主人難有存を奉ると述べたる禮を聞き流し直にフーグリ河に沿ひたる官道に進みたり

さて馬車を尋ねれども折悪しく馬車なければ止むなく一哩計りフーグリ河畔の大道を散歩せり時既に誰そ彼れを過ぎたれば晚烟彼地此地に籠りて風景さ乍ら日本の三四月の晚景に似たり去れども螢が木上草葉に戯むれ居るを見れば恰かも五六月の田舎の風もあり路傍の民屋の總て矮小なる芋屋にして土人の悉く床几に寄りて涼を納れ居るなり其体たらく我が八九月の納涼に異らず此の間だ無數の土人或は婦人を携へ或は小兒を連れ辨當を肩に掛け時として高談し時として經文を唱へ引きも切らず往來せり何事かと尋ねれば日中の甚いた暑くして旅行に不便なれば斯くの

夜分旅行を爲すなりと云へり去れば印度人は夜中旅行を爲せば従つて夜中茶店眞宵料理などと云ふもの大道に露店を設け繁昌大方ならず是に於てか露店の原始は夜中旅行より起りたる所以を知り印度の商賣は多分此の露店より發達せるものならんと想像したり

十月廿四日の晩に印度教に属する大祭日にしてカルカッタ府の内外は雜沓一方あらず一哩計り徒歩して漸く馬車を得カルカッタに入たりしが大祭日なれば各所のホテルの日暮より戸を鎖して客を謝絶せり馬丁を叱してホテルに行けと命ぜられ共馬丁も詮術なければ爰がカルカッタをれば御免蒙りたしと辞せり成程宗教の盛んある地は簡程に不便あるものかと眩きつゝ小屋に入りて何處か宿處を求め呉れずやと頼めば土人答へて今夜は仕方少し少し御不便ならんが吾等が知れる婦人の家に一宿し玉へとて馬車を案内せりさて馬車の中より外面を望むに是れは郵便局なり彼れは病院なり遠く見ゆるはシチーホールなりと誇り顔に示すものは悉く英國

人の手に成れる廣大の建築物にしてをさく、他の大都會に譲らずさて馬車を驅りて愈々中に進めばこは如何に恐るべき狹隘不潔の町に入れり祭日なれば踊るものはねるもの、假面を被れるもの、異様の扮装をなせるもの、到る處群集して馬車を進めん由もなし辛ふじて宿處に着きたる午後九時を過ぎたり、如何なる處にもあれ船の疲れもあれば今宵一夜を明さば最早用なし寢床を呉れずやと急がして土段を昇ると三度にして原人時代の穴居に似たる一室に入れり去來椅子を用ぬ玉へ暑くと候はずや扇ぎて進ぜんと會釋するもの、世にも怪しき少婦なり、借少婦の様を見るに足には左右各三箇の金環を箝め一箇の金環各夥き鈴を附し一箇の鈴又各彩れる房を垂れ歩を運ぶ毎にチリングワランの音して談話を打消さん計りなり、少婦は左右の耳に各五寸計りの金環を垂れ環毎に笄様の飾を附し鼻の兩孔にも小さき環を附し兩孔の中間なる鼻柱に上唇に垂れたる寶石を掛け音聲鼻を通りて甚はだ聞き取り難く手にも亦た金物を箝め身を動かす

毎に騒がしきと言はん方なくかて、加へて隣家にハモハメット教の信者間斷なく鐘を叩きて祈念に時を移し下層には佛陀の徒弟木魚を叩きて暫くも休まず街路へ行人の雜沓甚はだしく疲れ居れど耳立ちて眠られず下に行て家の様子を見んと後面に出づれば鬼子母神よりも猶ほ恐ろしき人形突立てり此處の壁悉く眞黒なれば怪しき壁かなと手を掛くるに幾千萬の昆虫ザワ／＼と音して逃げ出せり愈々仰天して三階に上り漸く眠に就けり翌日鳥の鳴けるを合圖に此家を辞し直に轉宿せり  
カルカッタにては馬車賃非常に廉價なれば市外の遊歩にハ必らず之を雇ふべしシドニー、メルボルン府にては馬車屋各々路傍に集まり、皺枯たる聲にてケーブ／＼と叫びカルカッタにては暑ろうな聲にてガ／＼と叫ぶなり是れハ御都合迄参りましょうと口説くよりは頗る意氣なり序に曰はん海外に出で、商人の無理勤めを爲さぬには威服の外なし元來日本人ハ未練らしく口説き立つるが得意と見へ小供が新聞を賣るにも長々し

き文句を弁べ立て腰を折り新聞を突き出し節をかけて詰誦せる廣告文を朗讀せり若し紳士淑女が乗車せる中に斯の如きうるさき事ありてハ外人の例として直に退去を命ずるなり去れば海外の新聞賣子の如き唯其の新聞名を呼ぶ迄なり大福餅と云はずして是れに大福あつたかひと云ふ文句をつけいんげんと云ずしていんげん養立てと講釋し何藥何丸と云はずして本家はとこそこと縁起を付け何書何雜誌と云はずして序文題字の外に長々しき講釋を加ふるハ日本流の廣告にして一向面白き處なし廣告は簡單にして聞へ易きを好しとすピーヤスソープの廣告文中世人の能く知れるはハよ、ピーヤスソープを御使ひなさいましたかと云ふなり

話すべつて石鹼の事に迄及びしがその亦後の事としカッカツマに行きガ  
ーリーと聞かバ馬車を勧むると承知し一も二もなく其の馬車に乗  
るなり市中ならば如何に遠くも十二アナ(凡そ三十五錢)を與ふれば充分な  
り近き處ハ八アナより二アナ迄とす馬車一日雇ふも二ルピー(九十錢)を與

ふれば此上なく満足せり

さて斯く馬車を雇ふて見れば何處か行く處を見付けねばならず先づ案内  
すべきは明蒸カーデンなり此のカーデンに行くにハ先づ暮の七時頃より  
行くを好しとす此の公園は市の東端にあり先づ多くの馬車に突き當らぬ  
様注意すべしカーデンの石垣を繞りて五千より三千に下らぬ馬車毎夜此  
に屯集せり之を上野公園電燈影寒く淺草公園をバや聲悲しく芝公園松風  
音すこしと云ふに比すれば非常の雜沓なり此に屯集せる馬車の悉く白人  
ラジャー(高位高官を帯びたる印度人)バブ(富有なる印度の紳士)の所有に屬  
するものにして一馬車毎に二三若しくは四五の奴隷を附して之を監守せ  
しむ奴隷は主人がカーデンに散歩せる間は馬の鼻頭に長跪して少しも動  
かず以上の馬ハ即ちメルボルンより送り越せる濠洲産の馬にして随分見  
事ある馬も多し馬車ハ印度に製するものにあらず車輪も覆も馬具も悉く  
英國より輸入し來るものなり

ガーデンに入れば二箇の大なる噴泉あり幾百千となく椅子を并べ散步者に便せしむ電燈の處々に林立して園内恰かも白晝に異らず園には音楽場を設立し絶へずバンドを奏すれば歩行の間自ら舞踏を真似るものさへあり緑草短く繁りて自然の絨氈を爲し椰子葉長く垂れて水滴るの趣きあり行くもの来るもの去るもの歸るもの淑女紳士白人黒人相交りて混雑言はん計りなし此の公園に半時間も遊ばば早や疲れを生ず可ければ之れよりニューマーケットに行て西瓜、マンゴー、アイスクリーム好み次第に命ずるを得べし此のマーケットハガーデンより程遠からず數町の郊野を離れば直に廣大なる建築物に出づるあり中にハ内外諸般の物品を蒐集し求めて得ざる物なしニアナ(六錢)を與ふれば四五人にて食ひ餘す程のバナ、(芭蕉實)を買ひニアナ(三錢)を與ふれば巨大なる西瓜、マンゴーを買ひ得らるゝなり其他魚類肉類コーヒー茶悉く至廉の價なり

是れにて夜も更くれば明日ハ動物園に行くとすべし動物園迄はトラム

あれば是れに乗るべし代はたしかニアナと記憶せり入園代ハ僅かにニアナなり園中には奇鳥怪獸毒蛇妖虫一々指點に暇まあらず中にも目立つて見ゆるハ巨大なる獅子、豹、虎の類なり獅子は聞きしに違はず百獸の王にして頭部の割合に大きと虎の三倍もあるべし試みに石を投じたれば怪獸四方を睨んで咆哮せりこの叶はじと逃ぐるも多かりき毒蛇にハ頗る巨大なるあり柵の上に渦の如く安臥せり此の毒蛇に石を投きたらんには毒舌を翻して毒氣を吹き掛くべしと聞きて惡戯を止むるも笑止なり其他犀の如き水牛の如き河馬の如き園中の沼に徜徉せり濠洲産の鳥獸類も多く集たりカンガロの異様なる飛び方オーストリンナのヌカリたる歩行鴨の嘴の臆空なる動作總て濠洲の風土を思ひ起さしむ鳥類の美麗あるとの述も紙筆には盡し難し金鷄の如きハ極めて通常にして造物主の智巧は斯く迄驚歎すべきものかと思はしむるなり動物園を逐一巡覽せんには全く一日を費さざるを得ず記者の報告足らずとせば行て見るを宜しとす

一日カルカッタより西五哩計の田舎バルチギリと云ふに遊べり用事も稍濟みたれば田舎の光景如何を見んと思ひ儘よ狂一氏と共に一臺の馬車を雇ひ便加利土人中のバブ(紳士)を案内に命じて朝早々ニューマーケットより出立せりニューマーケットの隣に最と廣き原野あり緑草一面に布て處々に樹蔭あり昨日通りし時は幾群の牛眠りを催ふせしに今日來て見れば幾千のテント集まり無數の土人此のテントの中に生活せるが如しテントの横には雲の如く羊の集まれるあり羊の聞きしに違はず能く主人の行く處に追隨し道草を食ふて餘念なきも一羊走れば道草を捨て、忽ち主人の向ふ方角に走るなり羊の實に主人なくては暫くも其の行く處を知らざるに似たり中央亞細亞、亞拉比亞と云ふも程遠からぬ陸續きなれば同地の人民が水草を追ふて轉居する様は是れと異なる道理もなしと思へば轉だ遠き處に遊べるの心持せり此處にて馬車を雇ひしが一日にて一ルピー八アナ(七十錢計)あり是れより馬を急がせて稍カルカッタの郊外に出たりと思

ふやバブは用事あれば暫らく此の店に腰掛け玉へと云へり其の店を雜貨雜種子菓實類を售る家なり持主は其のバブにして手代を召使ひ一日毎に其の出入を計算するの慣習なるよし此店にてシマ、カ、ざばんを打喰ひ最早用なしとクリを急がせて西に走れりクリとハ土民中最下等の人民にして頭部をクリと剃り落し二三本の毛髪を最と惜しげに残り居るもの、謂ひなり英領印度の政府其他偉大なる建築物の前を通りて程なくグリー河を横切れり同河畔の風景絶佳なるとは曩きに濠洲より印度に行ける時の紀行に述べ置きたり同行者儘よ狂一氏此美景に對して感歎措く能はず試みにバブに向ひて汝等此の好土を失へり汝此の好景に對して涙下らざるやとバブの齒を顯はして笑ひ頭を打掉りて此の好土を失したるハ吾等に非ずと辯せり是れよりバルチギリ迄は大道一直線にして行人頗る稀れなり此のほとりにて馬車を下り地處を檢分せり此散策は少しく用事ありたるが爲めなり元來カルカッタは元沼澤の地面にして到る處池沼

多く以て扉を養ふべく以て鷲を飼ふべし聞く處に依れバカルカツマとは犬豚の意味にして最初英人が此地に來り交易を求めし時開港場とあしたるが爲め英人を輕蔑してカルカツマと呼びたるものが地名に轉訛し今ハ五天竺の首府の名となりたるなり馬車を驅る道すがらも無數の沼澤數林幾百年の雜草を生育し人跡絶てあたら地利を遺棄したる者夥しく見受けたり扱最初に檢分したる地ハ大凡五エーカーの積にして全面沼澤なり處々に大樹散點して清涼の景を呈し一方にハ米田あり埋葬場あり前にハ一條の清流を控へ後ろは手近く町に接せり此地面の價ハと聞くに別に價と云ふ程の價はなしとの事なり狂一氏諸共微笑しつゝ次の檢分を急ぎたり大道の兩畔は大抵米田若くは他の青物を栽培せり予ハ植物學者ならぬバ其の名さへも聞き漏したるがカルカツマ市にてハ道路到る處山羊の葉に似たる草葉に白き粘液を包みたるものを賣り如何にも涼し相に飾り居ると猶は彼のアイヌク्रीム屋に似たり土人は此の草を好むと麻尼羅近傍

の土人が甘麻を好むに同玄便加利土人の右の草を噛み齒も唇も朱の如くなし恰かも煙草を喫するが如くせり路傍に棚を造り一面に草を育て居るハ即ち其草なりと聞けりバルチギリに到る迄に地處の數大凡四ヶ處を檢分せり廣大なる地所鬱蒼たる深林……竹椰子其他同地に必要なる植物の繁茂せる部分……沼澤島等七エーカー位を合して一年のレント僅に十五ルビ(六圓七十五錢)か頂上なる由に聞けり此道路には無數の山羊を放てり山羊の悲鳴は實に聞くに堪へぬものなり余は未だ鹿の鳴きたるを聞きしとなく時鳥の鳴きたるを聞きしとあけれども山羊の悲鳴にハ及ぶまゝと思へり蓋し中天竺の廣野太陽蒸灼して萬象炎熱の爲めに苦しめられ處々の山河幾星霜の昔より悲色を帯び民族廢亡の恨み此の山羊の口を借て出るものならんさればにや一夜カルカツマ市を散歩せるに孤窓燈影の瀾るゝ處異様不可思議ある音樂を聞きしがこは如何に歌曲ハ全く此の山羊の悲鳴より變化し音調悲涼亦日本樂の比にあらず樂器は蛇味線様のもの



と覺へたるが節々巧みに山羊の悲鳴を寫し聲激して聲勃流れて又た止まり止まりて直に流れ天涯の孤客をして殆んど亡國の音樂に泣殺せしめんとしたりき之を彼のスコッチ音樂薩摩琵琶に比すれば以て國人の氣象を推せるに足らん

フーグリーの支流マカラ河と云ふは小流なれ共此頃は耕作の爲め河流を止めたれば河は清水にて水動かす青空白雲河畔の草木悉く此の鏡面に寫りて美麗畫にも書かれず馬車を下りて此に散歩せしが最早用事濟みたれば馬車を急がして歸路に就きぬ

#### 古昔の印度人と今日の印度人

印度には大別して四ヶの民族あり一ブラミン、二ヘスナ、三ハイサ、四ストラ是れなり此の区分は印度教より起りたるものにして宗教上の族籍なりカルカッタにてハブラミンとストラ多く中間の二族ハ甚だ多からず印度教の制規に依ればブラミン、ヘスナ、ハイサの三族ハ聖衣を着せざるべからず

聖衣ハ右肩より左胸に懸くるものにして即ち日本の謂ふ袈裟なり第四のストラの裸躰にして袈裟を懸るの權利を有せずブラミンは比馬拉亞連山脈の麓よりコモリン海峡に至る迄最高なる敬禮を受け印度教の主宰者として世事に關せず専ら印度教の法理を講ぜりヘスナは軍人にして釋迦氏即ち此の族より出でたりハイサハ農業商事の専門家にして即ち平民とす第四のストラは穢多よりも甚だしき擯斥を受け社會最賤の業にあらざれば之を執るを得ず此の四民族の區別は太古より今に至るまで曾て變更することなく幾度か激烈ある宗教改革者輩出せるにも拘はらず其の功を收むるもの甚はだ稀なりさて印度人民の族籍を詳細に調査すれば便加利州のみにては百三十の區別ありと英領印度の統計家ハンマー氏は云へり此の百三十種の階級ハ各婚姻を禁じ喪祭を共にせず嚴重に其の區別を失なはず富の勢力も情の勢力も智の勢力も決して此の區別を破ると叶はず宗教上の嚴律として遵守せるとなり

アラミン種族は印度歐羅巴人種の正系統にしてアーリヤン大種族の本原なり希臘羅匈羅馬の民より今の日耳曼魏利頓の民も亦た此の印度歐羅巴人種の正系統より流れ出でたる支流とす元來此の種族は驚歎すべき頭腦を有する民にして東洋哲學の原始たるベダス十萬の心性説ハ即ち此のアラミンの頭腦より編み出されたり瞿曇氏出で、五十年の口舌を動かしたれども其心性哲學の基礎ハ一としてベダスに出でざるはなし彼れ等が使用せし日常の言語サンスクリットハ最も高尚深微なる言語にして人類の智情意を發表するに最上の度に達したるものなり例するに英語は普通の思想を言ひ顯はすに適當し日耳曼語ハ哲理を言ひ顯はすに適當し佛蘭西語は文學の思想を言ひ顯はすに適當し日本語は情緒を言ひ顯はすに妙なり然れ共各其一に妙を得て他を兼ねるを得ず獨リサンスクリットと數者を兼ねて完全無欠なり緒意山那教の博士ラマンバイン氏の二十五年の間サンスクリットを學べども猶ほ其の奧義に到るを得ずと語れり然れば上

古の婆羅門民族が斯の如き濫難の言語を使用し偉大の思想を構成したるを觀れば其の民種の高尚にして驚くべき頭腦を有せるものありしと知るべきなり

アラミン民族は今日に於て亦た昔日の頭腦を有せずと雖ども容儀端正應接丁寧一見遙かに他の三民族に起逸せりカルカッタ今日のアラミンハ生存場裏大なる失敗を受け居れども其の尊敬を受くるの點ハ敢て昔日に降らずアラミン今時の衣服は亞拉比亞人の衣服に髣髴し長きシャツを着しシャツの前より別に稜ある前垂れを懸け地上に垂れたり常に直立して歩行し決して俯瞰するとなしアラミン中の少年にハ手を背に廻はし反對の方向にある自己の耳をさぐり得る者少からず以て頭部より足部に至る迄身軀の一直線なるを知るべし蓋し支那人の如き日本人の如き多くは俯して歩行し頭部を前に垂れ腦髓を脊髓の上に置かず一西人の説に依れば是れ即ち亞西亞人種特有の惡僻なりと云へり

カルカッタに於ける今日のブラミンは總て散髪にして靴を穿ち身体に施す宗教上の紀號は皆な之を捨てたるが如しカルカッタ府中の四辻に立つて往き通ふ土人の顔面を見るに或は白毫を附し或は赤毫を附し或は黄色三線を施し或は綠色七線を施し或は顔面餘地なく悉く文字を以て之を填め或は髪の毛の長さ事三四尺に及び或は一とつまみの毛を残して餘は悉く剃り落し或は椰子葉を以て頭を飾り或は布を以て頭の周圍を纏ふなど奇々怪々殆んど記憶に暇まあらず唯ブラミンのみは以上の風習を捨て、更に之を用ひざるものゝ如し。

今日の印度人は勞働を以て世の罪惡と心得居る者に似たり其の勞働を惡むことの甚だしきは稚兒を鞭つて水夫の業を執らしむるが如し甲水桶を乙に送らんとす甲の觀る處街上にあり乙之を受け取らんとす其觀る處丙にあり甲は乙既に受取りたるものとなし手を離し乙は空を搜りて屢失す水桶覆りて床爲めに濡ふ土人敢て驚かず喃々談えて日を消さんとを如何

なる勞働を執るも印度人の決して其の業に注意せず狂げて他事を談じ居れり又た一般に腰を折るを嫌ひ如何なる場合にも必らず長跪して業を執り膝は頭に至り手は地に垂れ不倒翁の坐を移すが如く蠢然として働けり余の數度土人が地上の物を拾ふに決して腰を折らず首を垂れ右足を擧げて其物を攫まんとするを見たり之を攫まんと欲して屢失し漸くにして之を取り上げ後ち足より手に渡すなりマコーレー氏便加利州の人民を評して曰く彼等は太古より蒸氣熱の中に生育したる人民なれば英人を驅りて之に入るゝは猶ほ獅子を放て羊群に投じたるに異らずと此言其の實を穿てり英人アックランド氏の其の實驗を記して曰く余等夫妻が食事を爲すに十二人の印度人給仕を爲せども一向に抄取らず英國の小童一人にも及びざると千萬なりと同氏又た其の實驗を記して曰く余は一人の土人が両足を穴中に入れて休息し後ち之を抜かんと欲して両足已に成育し遂に抜くと能はざる計りの長日月を座禪して暮らせしものあるを見たりと是れ

印度土人の特病にして時々兩足若くは一足の俄かに成長するを見たるなり、カルカッタ市中にては土人別に勞働らしき勞働を執らず煉瓦を運ぶに三箇若しくは四箇を頭上に載せ最も重もそりに持ち運ぶなり荷物は悉く牛馬に引かしむ牛は牀稍小にして頸にハカメルに似たる凸肉あり牛の遲緩なるとい頗る土人と性質投合せるものと見へ木上の鳥下りて牛の背上に啄めり朝へア町を行き過ぎ四五の土人が牛と共に路傍に沈睡せるを見盡ベシチツク町に用を調べ晩れに歸宿せるに糞の土人の相變らず沈睡せるを見たりカルカッタの炎熱は三毒七毒を合入せる故か靜坐睡眠の外又た他事を考へん暇もなきが如しカルカッタに着せる翌日農産物會中の圖書館に行き印度各州の新聞雜誌を繕きしが土曜日雜誌中に左の投書ありたり

敬愛なるトム、余は先きにリパールを發して今カルカッタに着せり吾等が前日の交遊は轉た吾が腦を犯してフーグリー河邊の熱地に昔の夢を結ばしむるが責めての快樂なり……蚊と蠅と蟻と牛糞……總て物凄し……親愛なるトムよ此國の民は頗る奇異なる民なり此頃も土人一人吾等を追て物言ひ懸けたるにうるさく思ひたればいさなり打ちたり、土人の齒を顯はしてはこくと微笑せり怪しかる奴かなと溝の中に突き飛ばしたるに同じく微笑し居りしが用ころあれと引き出したれば恰も人殺しに遇ひ救を求るが如き聲して叫び始めたり巡査來りて放してやれと言ひたれば之を放したりトムよ翌日馬車の中にこくと笑ひ居るものあるを見たるが是れ即ち先きの土人と同人なりき……

……シャツク再拜

#### 印度人種と日本人種との關係

骨相の上より見れば印度人種と日本人種との關係は寧ろ支那人種と日本人種との關係よりと縁遠きものなり然れども其の生活及び思想の點より論ずれば日本人種は一度必ず恒河の水を呑み比馬拉亞山上の嵐に吹か

れたるもの、如し曾て余輩と共に南洋に赴きたる田代安定氏のグアム島に於ける日本儀式の由來を記し千年の古昔アツポン神(グアム土人の神祖にして日本人なり)彼の地に降臨し祖先の遺式を残し去りたるものが隠れたるが如く顯はれたるが如く斷つが如く續くが如く綿々として其痕跡を残したるは東洋史傳中の一奇快談と稱せざるを得ずと云へり思ふに日本人種が其の文明を支那より輸入しながら純粹なる印度文明の痕跡を保ち居るが如きは或て人種學上至大の關係あるものには非るか一二の所見を述べて參考に供せん

一衣服 日本のおんどしは元來何れより傳はりしものか衛生上甚だ不合理のものありとは外人が常に驚く處なるが右は印度流義の儘を採用したるものなり蓋し南洋土蠻のおんどしと婦人のおんどしと異なる處なく歐洲人種のおんどしは男女共に股引の形ちなり獨印度人種は日本流義のおんどしを用ひ古來曾て變る處なし一日佛陀伽耶に行かんものをも思ひ圖書館

にて佛陀伽耶と題したる書を繕きしに伽耶城の古墳より掘り出したる石像の寫しあり就て見れば裸躰の菩薩おんどし一卷の羅漢など夥しく見へたるが中にもおんどしの様子は今日と毫も異なる處なし

二器具 支那人は陶器を發明し日本人は漆器を發明し諸般の日用器具を造れり獨り印度人の金物を以て日用の器具を造り曾て他の日用器具を探用せず食器より洗面器に至る迄苟くも日用器具と稱するものは悉く眞鍮若しくは其他の金物より成れり日本にて佛教の各宗が黒聖人の肖像に供する金物の食器は即ち印度の食器を其儘に輸入したるものなり最も驚くべきは吾那の娼家に用ゆる昔し流義の器具は印度の器具と露も違はず印度人の朝疾く起き出で灰を以て以上の器具を研き立つるなり彼等には此の金物を研くとは頗る適當の勞働と見へたり

三住居 日本の家屋が熱帶的に出でたりと何人も是認する處なるが店の躰裁の如きは印度と少しも異なるなし諸君にして萬里懸絶の旅

を爲し突然印度に來らば店の弊裁に於て故郷と異なる處なきに驚愕せん菓子屋の前に至れば通常の菓子の悉く小さき箱に入れ幾品ともなく重ね并べたれば蜜蜂徘徊して恰かも蜂の巢に似たり小間物屋の如き路人の足に觸るゝ計りに陣例し同じく小なる箱の中に区分せる様吾邦の小間物屋と同様なり鍛冶屋の如き労働場の弊裁之を製する器具毫も異なる處なし最も奇異の想ひを爲すの番頭丁稚が以上の物品を堆積せる中に静坐し居る弊殆んど日本の町を過るの看あり

元來日本今日の文明の熱帯文明の極度に達したるものなれば彼れ歐羅巴文明なる寒帯文明と比較せば自ら一種の風味ありて巧みに洋人を心酔せしめ彼等をして日本開化の性質の全く特殊の天意より出でたり美術の精粹を集め了したるものなりと言はしむ然れども靜かに學理上日本開化の性質を研究せば是れ即ち熱帯懶惰の分子を以て成り立ち好奇上歐洲人の眼に美なりと雖ども實用の點に於ての少しも取る處なし彼等は印度支那

の文明を嫌ひながら獨り日本の文明に心酔し日本の衣服を脱し玉はゞ妾は郎君の愛を斷せんと怨み并簪島田の流義を捨てんにの日本の淑女の崇拜するに足らずと憤り紙障子の衛生に適せり疊は清潔なり夜具は便利なり茶は芳ばしと徹頭徹尾日本流義を稱揚し遂に日本狂となりて止る處を知らざるもの歐人中甚はだ多し然れども彼等は實用の上より眞から之れに焦るゝに非らず日本なる一の社會を天工の樂園と爲し自慰らまんとする迄の事あり日本人たるもの若し世界の智識を集むるとを忘れ彼れ洋人の説く處を聞て之れに従はゞ千年亦た彼等を凌駕するの時なからんとす優等民族の一種の不隨意的勢力あるものを有せり劣等民族が滅却の否運は遭ひたるの常に彼れ等が不隨意的勢力の刺撃に遇ひしなり彼等は別にコレラを傳へて土蠻を滅せんと計りしには非され共白人と土蠻の交接は不隨意に彼等を瘞せり又彼等は宗教を布きて土人の乖離を計らんと欲せしむる非されども宗教の繁昌不隨意に彼等を乖離せしめたり又た彼等は

別に東洋民族の進歩を嫉み國各其流義あれば汝自身の流義を採用せよと云ふに非るべけれども彼等が心酔の不隨意に日本の進歩を遲滞せしめ折角勤勉的文明の境に浜りたる民をして直に懶惰的生育の境に落下せしめんとす

今は日本の生活の印度人民と露違はず唯聊が奇麗なりと言ふ迄なりとせば東洋民族の眞似を爲して彼等が因循不活潑死灰枯木の生活を採用せんか寧ろ歐羅巴流義を採用して國運の進歩を計らんか兎角今日に於ての杞憂とか想像とか情實とか言ふとを止めて公正明平なる道理に準據せざるべからず日本人は唯一つの場合を除きては總て心虛氣平能く世界の道理を聞くの明あり請ふ印度流義の生活を棄てて歐洲流義の生活を採用するに躊躇するを勿れ

カルカッタに於ける諸國民族の勢力

一步海外に蹈み出して見れば國內の紛々たる雜事の意にも留まらず唯異

種民族に對して已れが民族の勢力如何を顧るのみ此の感慨の夢にも現にも忘るゝの時なし然るに到る處の山河獨り彼の碧眼民族に幸して我が日本人種の如きは未だ一のネーションたる資格を保ちて生存社會に其の勢力を占むるものあるを見ず日本にハ洋行者少しとせざれども多くは官命を帯び公用を帯び或ハ學術講究の爲め或ハ要務調査の爲め日本人らしき面目を保て外人の前に立つ者のみにして眞個に其の獨力を以て彼等の間に介立するものハ皆無と云ふも亦た佳なり

カルカッタに於ける英人の勢力は讀者の想像するが如く驚くべき有様なり今之を縷述せんとの煩に流れて讀者の厭倦を來す可けれハ之を略すべしと云ふハカルカッタの東方八哩計の田舎なるが同處にハ英領印度陸軍の屯所あり其他在カルカッタの商人、醫師、代言人、學者、新聞記者等總て同處に別荘を構へ結構偉大、生計豊富之を彼の茅屋の檐の下二三疋の山羊を繋ぎカレライヌを食つて安眠し居る土人の生計に比すれば實に

カルカッタに於ける諸國民族の勢力

民族競争の結果如何を感知し得べし土人は多くの家を持たず椰子樹下ツサ草上ツと稱する草類あり柔輦にして臥眠に宜し到る處家と爲し居れば朝早く市街を散歩するに商館の檐の下會社の板の間に犬の如く牛の如く睡眠し居るもの數ふべからず好し家を所有し居るものにもせよ總て戸を明け放しにし一葉の席の上に睡眠し居れり

困窮の底に沈み果てたる男二人破れ屋に寒き夜を明しけるが五更一人の突雲漢窓を破りて入來れり甲素破大變盜賊來れり……乙止々靜り玉へ彼奴何か落して行たら二人して拾ふでないか

と云ふ哀れ果敢なき有様も印度の土人に取りては通例の事なり英人に次で生存社會に勢力あるは支那人あり當市の支那人は多くは靴師なり元來支那人の海外に出で、の大抵同業組合を組織し其の便利を謀るもの、如しシドニーにては骨董店茶店多くメルボルンにては一千二三百の支那人悉く指物師と云ふも不可なしゲイツトリア所在の箆笥テーブル

の類は悉く支那人の造りたるものにあらざるはなし

カルカッタには支那印度航海會社の出張所二箇所あり一ハアアカース船會社と云ひ一ハシャーンス船會社と云ふ此の兩會社の總て支那人の組織したるものにして其の利益悉く支那人の手に入るなり船の數ハ兩會社を合せて殆んど四十隻あり船長機關師等は總て英人を雇ひ居れり事務上の役人の悉く支那人を使用せり支那人に次で勢力あるハ亞拉比亞人及び猶太人とす此の兩種族は其の心性相髣髴し支那人英人の如く自己の流義を押し通す民族にはあらずして能く變化し能く媚を呈し印度に來れば先づ洋服を脱して印度人と同様の風を爲しさて家も同じく印度流義の家を建て食事も亦た印度人と同じくバナ、コ、ーナットを食ひ徹頭徹尾印度人に變化して彼等の歡心を買ひ以て生計場裡に勢力を得んと試み居れり而して彼等が策ハ常に其功を奏するを見る



我々が敬愛せる姉妹二十人計りあり彼等は英人日耳曼人佛人に愛せられ支那人猶太人亞拉比亞人にも亦た愛せらるゝなり然れども彼等に對して苦々しき攻撃を加ふるは余が忍びざる所なり何となれば彼等の自ら好で之を爲るに非ず日本現時の經濟彼等を驅て天外萬里の外に憂き勤めを爲さしむるものにして實は自國に在りて餓死せんか若しくは外國に行きて露の命を保たんか云ふの境に頻し止むなく爰に至りたるものなればなり結局日本の男子が其の敬愛せる姉妹を扶助すると能はず無慘にも無罪善良なる淑女をして此の境に至らしめたるを恥るの外なし右の日本婦人は他の日耳曼佛蘭西猶太の同業婦人中には好評あり二十人の中一人は佛蘭西人に嫁し一人は便加利土人に嫁せり余は戯れに黒ンボの女房となる故さて一氣の知れぬとよと云ひたれば一紳士は答へて日本人が黒ンボに香花を捧げて之を崇拜するは一層氣の知れぬ事なりと云へり

一日吾が姉妹の生活如何を知らんものをと彼等が本城に至れり家内の頗

る清潔にして生活も亦甚はだ好し各日本服を穿ちソフアーに依りて或るものは眠り或るものハ裁縫せり聞く處に依れば海外出稼の日本婦人は決して日本の男子に物申さぬと云ふ規約ある由にて始めの程は冷淡を極めたり是れハ以ての外怪しかる慣習にして甚ハだ謂はれなきとあり職業婦人は獨り日本のみならず英國の如き佛蘭西の如き日本に幾倍するも知れず然れども彼等は能く本國人に馴れ下等の男子と行々は婚姻するともあれば英國の如きハ見て見ぬ振を爲し職業婦人と見れば一磅位にて幾千里の殖民地に輸出せり議論はさて措き吾等が訪問したる婦人は何れも長崎近傍の産にして三人の中二人は日本人なる己れの戀男に賣られたるなりと云へり

雇主ハ亞拉比亞人にして日本の男子と見れば連れて逃げはせぬか直に親しくなりはせぬかと瞬間も油斷せずとの事なり試みに英人日耳曼の男子ハ如何に思ふかと尋ねたれば無罪なるエソボの中よりひやかしますなぞ

う云ひますな杯の戯れ語溢れ出でたり思ひ廻せば日本民族の勢力の返す  
 けも哀れなる有様なり

### 印度社會改良問題

試みに當カルカッタ市の圖書館に行き印度各州の新聞雜誌近刊書籍を編  
 ぐに時事の問題と稱するものは悉く印度社會改良問題にあらざるはなし  
 此の運動の主として在印度英人の幹旋せる處にして印度人中にも頗る活  
 潑なる運動を爲すもの少しとせず諸君が知れる蘭梅女史の如き即ち其の  
 一人なり今ま此の大問題の主意を述べんとせば其の起原たる印度教の事  
 を一言せざる可らず

印度教は思想深遠理論奧妙なると敢て佛教及び基督教に劣らず唯此の宗  
 教の制度上甚はだ後害を残したるものは階級種族制度是れなり此の階級  
 種族の觀念は即ち一神崇拜の理に根底するものにして恰かも猶太教徒が  
 イスラエルの民族を以て唯一なる神の子と信じ萬國の民を見ると恰かも惡

鬼を見るが如くすると同様なり印度教徒信すらくブラミン民族は全智全  
 能なるクリシヤナ(上帝)の愛子にして他の諸民族はクリシヤナの憤を被れ  
 る劣等民族なりと然れば他の諸民族を蔑視し嚴重なる區別を立つると豫  
 想の外に出でたりブラミン以外の三民族は只管ブラミンを以て半神半人  
 の種族となし之を崇拜するを以て來世の福縁と心得皇帝長者と雖どもブ  
 ラミンの尊者に遇はゞ大地にひれ伏して敬禮を施せり

此の階級種族制度の害あるとは三千年の昔に既に救ふ可からざる域に  
 進たり此の時に當りて絶大非凡の皇子無邊無上の誓願を抱き中天竺の伽  
 耶城(カルカッタ)より四百五十哩西北に崛起し先づ難行苦行を以て聖智を  
 得るの理を排斥し天下宇宙の諸民族は上下なく高低なく平等同權なりと  
 主張し階級制度を排したり然れども皇子が説は不幸にして五天竺に好結  
 果を得ず同制度は皇子没後五百年の後昔日の勢に復せり續いて幾多の論  
 師輩出して皇子の説を助けたれども隻手を以て狂瀾を支ふるに似たり爰

一千四百八十五年便加利州のナチャ村落に大聖緒意山那出で自らアラミ  
 ンの身を以てクリシヤナの崇拜者たるを辞し激烈なる民族平等の説を唱  
 へたりしが其の結果と實行上甚はた微々たる形象を現はせり  
 斯の如く印度教の階級制度の幾十度の抗抵に遇ふにも拘はらず毫も其勢  
 力を減ぜず今まや宗教の力に依らず今代文明の力を以て此の制度を破ら  
 んとするに至りたるの誠に刮目して見るべき事なり然れども余が意見に  
 依れば印度の階級制度は實際に於て之を排斥すると至難ありとす  
 苟くも物の理非の考ある程の人は階級制度を聞て之を指彈すべく此の制  
 度を破らんと企てたる豪傑を見て心竊かに欽望するとならん然れども獨  
 り手は印度に於ける階級制度の存在を可とし之を排斥せんとする人々の  
 無効を憫むものなり請ふ其理由を述べん  
 蓋し人種平等萬民同權の説の既に死灰に屬せる古代の思想にして今日最  
 新の思想は人種滅却と云ふ四文字是れなり此の四文字ハ吾々人類があら

ゆる歴史の上より証憑し來り萬般の學說の上より摘萃し來れる實驗上の  
 理論なり今印度に於ける階級制度を見るに其根底の固くして到底之を破  
 る事の至難なるハ正に民族滅却の一現象を表はせるものなり  
 つらく、ドドラ民族及びハイサス民族の様を見るに唯蠢然たる蠕躰動物  
 が生き甲斐もなき世をあじきなく送る一群躰に過ぎず其の容貌、其の品位  
 其の習慣、其の精力、其の精神、卑劣なるが上にも愈々卑劣にして愛すべき處  
 は露程もなく親しむべき點は兎の毛の先き程もなし唯之を一見する計り  
 にては是れが人類と云ふものならん人類も果敢なく穢きもの哉と歎息せ  
 しむるに至る以上諸民族の小兒がアングロサクソンの稚兒と相伴ふを見  
 ば恰かも嬌艶ある牡丹花に一ツのナメクシリが攀ぢ上りたるの心地する  
 なり

ロングフェロー氏稚兒を咏じて是れ人生の花なりと云ひ宇宙の善美眞は  
 悉く金毛緑眼紅頬嬌笑の中に包含し盡せるもの、如く云へり然れども氏

をして印度劣等種族の稚兒を見せしめんに、社會萬般の罪惡の悉く彼れ等がむづかる黒顔の中より飛び出づべしと信せん

既に以上の如しとせば彼偉大なる智能を有せるブラミン民族と嚴重なる區別を立て、同民族の尊威を保護すると至當の事なり此に二杯の水ありと假定し甲は清水乙は毒水ありとせば之を區分して保つと好きか甲と乙とを攪亂して半清半毒の水を造ると好きか彼印度の劣等民族と斷じてブラミン民族の清徳に汚すの毒を具有せるものなり去れば社會實際の働きに於て階級制度を破ると甚だ不道理の事なり若し之をしも道理なりと爲さば宜しく日耳曼人をして猶太人を親しましめ米人をして支那人を愛せしむるが如きも亦た至當の事と謂ふべきなり

○印度社會改良問題中重きを占むるは少女婚姻の一條なり印度にてハ七八才にて嫁ぐもの少しとせず十才にて兒を生むもの亦た多からずとせず十才若しくは十一二才にて母と呼ばるゝは吾邦人に取りては驚くべき次第

なり黒くハあれども能く其の顔を見れば猶ほ幼女の面持離れず幾分か無罪なる愛嬌を帯び居る少女が蛙の進化したりと云ふに左も似たる赤兒を携へて煉灼せる熱地を徒足に歩行せるハ哀れなる有様なり是等の少女ハ赤兒を養育すると頗る奇なり幅廣き金巾を右の肩より左の脇に懸け右の肩にて之を結び左の脇に稚兒を容れ恰かも袋鼠が其兒を育つるが如くせり思ふに己が生みたる子を抱くとは此の少女には不適當の勞働ならん少女婚姻の結果はさらぬだに柔弱なる印度人民をして年一年に其の度を高めしむ去れば其の少女より生れたる小兒の成長したるものハ何れも遊食者の仲間に墮落し勞働を厭ふこと鬼を見るが如し東京にて鐵道馬車に乗るに店の丁稚が馬車を追ふて勢ひ能く驅け走ると競馬に犬の走るが如く航海に鳥の舟を追ふが如く景氣の好きものなれども印度にて鐵道馬車を追ふ小兒は總て袖を乞ふものにあらざるはなし馬車の止る處にハ四五の小兒身に一片の布をも着けず赤條々のまゝにて死鳥の泣くが如く最と

悲しげに袖を乞ひ其うるさきこと言はん方なし殊に乗客中には常に外國の婦人淑女もあれば不躰裁見るに忍びず簡程に馬車を退ふて走るだけの勇氣あらば何か勞働するとは出來ぬ等なければども命令の下に働くと彼等には至難の事業なり

印度にて若し路を失し何町へ行くに何れの路を取るべきかと尋ねれば赤裸の少年の直に自ら案内申さんとて決して之を教へず二三十間の處も自ら案内したる上右の手を前に指し出しボクセスと訴ふるなり印度人が外人に對する談話の十中七八は悉く此のボクセスなる一語より成り立てりボクセスなる語の即ち合力の意味なり若し此のボクセスを拒絶すれば彼等ハ何時迄も其場處を去らず鞭つものにこゝと笑ひ足にて蹴るも齒を顯はして笑ひ頻りにボクセスと訴へ彼等が得意なる文句を并べ立つるなり曰く

父なく母なく兄弟なく姉妹なく女房なく子なくカレーなくライスな

くマツタ主人御一人

と連呼して合力を乞へり以て印度人民が其の精神の劣悪なると極度に達したるを知るべし白人が經營せる都會に行けば些末の事より一身の大なるに至るまで親切を旨として萬事の世話をなし曾て報酬を受くるの心なきものと比すれば其の差異果して如何ぞや

以上論をたる如く印度土人が精神上の腐敗は悉く彼等が身軀の構造より來り身軀の構造は主として少女婚姻より來らざるハなし元來印度教の説く處に依れば精神と身軀の二者は純然たる別物にして何等の比例を有せず唯身を痛め食を減じ牛の眞似を爲し犬の生活を爲しあらゆる難行を嘗め盡さば人類が求むる聖智を得べしと爲せり去れば印度人は身軀の日に年に衰落するを物の數ともせず如何に劣悪なる生活を爲すも更に憂とせず寧ろ宗教上の勤めと爲せり佛教の如きホイソニズムの如き何れも此の説に反對したれども其の効を收めず中にも佛教の如きと嚴律を設けて少

女婚姻の制度に反対したり然れども其の結果は却て意外の點に出でた。今まや蘭梅女史を始め志あるものは誓つて印度社會墮落の基たる少女婚姻の習慣を破らんとす其効果は正に注意すべき一顯象たらん。

次の一問題の後家虐待の一事是れなり右の印度教の制規に従ふに婦人は必らず其の亡夫に殉せざる可らざるものとなし夫の死せし後猶生き存へ居るを以て無上の罪惡となせしに依る印度には十二三歳の後家あり高貴の家にては決して此の後家を扶助せず親も兄弟も朋友も恬として其餓死を待ち居れり蘭梅女史の幾多の協會學校工場を設立し右等の後家を以て文明の教育を受けしめ相當の生活を興ふる事に盡力せり此の一事は稍進歩の見込あるに似たり何れにもせよ印度教の弊害推して知るべきなり。

#### 宗教事情

印度教が一方に斯の如き攻撃を受くると同時に一方に非常の信徒を得デルハイにては印度教保護教會を組織し三年の間に一百の支會十餘のサ

ンスクリット學校を起し白人重もに運動の中心たり又は佛教は此の地方に於ては盛ならずと雖どもマドラスシイロンの地方に於ては非常の勢力を有せりさて印度教に次で勢力あるは緒意山那教とす余は今緒意山那教の何物たるを知りし順序を述べん。

時に釋伽の聖地佛陀伽耶に行くの志を起し圖書館に行て同地の報道を求めたりしに佛陀伽耶と題せる一書あり報道綿密にして漏す處なく最早同地に行くの用なしと決心しテーブルに倚りて印度は本に暑い處であると歎息したればテーブルの向ふより貴殿は何國の住民にて候ぞと一聲落下したり仰ぎ見れば身體長大にして一見便加利種族の酋長たる相を示し眼光偏に炯々として胸臆千萬の智識あるを示し雙頬笑を舍んで度量深潤の様を現はせる人の口より出でたるなり拙者は日本の住民にて候と答へたれば紳士の座を起ちて子の側に來り免し賜はれ日本の紳士に物申すは今が始めてに候、貴下の當圖書館にて長らく調査せらるゝにや否二三日前よ

りなり今佛陀伽耶に行かんものと思ひ此の書を引き出せるなりと云へば紳士の自分先頃同處に行きたる事あれば其の一斑を話すべしとて大に便益を與へ呉れたり此人は即ちラマー、ラマン、パイン氏と稱しホイソニオム即ち緒意山那教の博士にて當地には有名なる學者なり談移りて佛敎の事よりホイソニオムに亘り其れより氏は言を改めて日本の形勢に付き綿密なる質問を爲せり

氏曰く貴下が始めて此の亡國に渡來せられたる時は定めて異様なる感を起されたるあらん其感覺如何

予曰く予はメルボルンより來りたるなり始め當地に來る前には元より印度の歴史を閲覽し英國が處置の殘酷あるを惡み印度人民に向つて少あからざる同感を表し一度印度に行かば志し有る少年を語らひ國家進歩の計を談ぜんと思ひ居りしが當地に來るに及び前の豫想の全く滅失せり何とあれば彼等は日本人を認めて同じく歐羅巴人なりと心得敢て其の深慮を

談ずるの志なく且つや其の心性……明らさまに申さば……如何にも

高尙ならず従つて國事を談ずるに足らざればなり

氏曰く貴下が明白に其情實を言顯はし玉ふの喜悅の至りなり然れども便加利人民中亦た語るものなしとすべからず予語を狭んで曰く然り猶ほ貴下の如き人に面するを得たるは幸ひなり先づ貴下に問ふべきは日本今日の形勢なり貴國軍事の進歩如何

余曰く日本軍事の進歩は非常なり軍艦は佛國へ新注文の三隻を合せて總計二十五隻あり水雷機は二十を數へ海員は悉く日本人なり陸軍は常備兵五萬あり其の使用する處の小銃は日本の新發明に屬せり

氏曰く日本に於ける農工商の進歩及び科學の進歩は如何

余曰く農工商の三業は未だ甚はだ進歩せず日本全國の十分の八は猶ほ山岬を合せて未耕地に屬せり工業は技術の進歩に連れ望を屬すべきに似たれども就中鐵工の如きは悉く外國の輸入品を待つ觀あり又商業の一事

ハ浮沈常ならずと雖ども漸く海外貿易の一事に注目するに至れり國家の基ひとも稱すべき農工商の三業に就き貴下に向つて満足の答を爲す能はざるハ予の悲しむ處なり然れども科學の進歩ハ頗る激烈にして世人の目を廻せ計りなり就中醫學の一事に至りてハ將に泰西醫術の進歩を凌駕せんとす余の知る處に依れば日本のドクトルにして伯林の醫學社會に貴重なる著述を爲したるもの二人光學上偉大なる發見を爲したるもの一人解剖學科に教授を爲したるもの一人あり哲學文學の如きも亦た之れに劣らず結局科學の一事に至りては實に泰西の進歩に追隨すと云はず吾等ハ既に彼等に超越したるの考なり

氏曰く同じく東洋に國を立てながら日本の如き進歩國と當印度の如き退化國との懸隔ハ驚くの外なし見らるゝ如く吾等は一挺の小銃も一袋の火藥も持たず之を輸入するも嚴罰あり之を製造するも刑法を免れず且に英國の配下に在るも夕べに露國の呑噬に遇はん且つや五天竺の人民心意相

互に離間して親睦の摸樣なし唯五天竺中稍頼むべきものハ便加利民族あるのみ然れども便加利民族亦た宗教の上に相争ふて止まず英人は此機に乗じて常に離間の策を行へり彼等ハモハメット教徒に對して曰くモハメット教は神聖無比の宗教なり國各々其流儀あれば汝等ハモハメット教を棄つ可からずと又た印度教徒に對して曰く印度教は世界哲理の淵源にして之を保存すると即ち印度人の面目なりと斯くてデルハイには同教の保護協會を起し白人相携へてクリシヤナを尊信し一百以上の支會を設立せり彼等は亦佛教徒に對して曰く佛教は其信徒亞細亞大陸に蟠り八億萬の諸民を包含せり宜しく各教徒に對して其の眞理の在る處を示さべしと斯の如く從來基督教宣教の爲めに盡したる力を一轉して印度に於ける諸宗教の保護を唱道せり彼等ハ曩きには基督教を宣傳して今ハ其の策の非なるを悟れり何とされば同一の宗教を布くとして印度諸民族の統一を促すの機會を造ればなり



余曰く便加利民族は身軀薄弱にして北印度人民に比しての志氣固からずと聞けり貴下が高説に於て將來頼むべきは便加利種族のみありとは別に説あるや如何

氏曰く宗教上の區別を擱き土地に依て區別せば現今六種の民族あり一コリス種族、二パンジャーブ種族、三シークス種族、四マラーツマ種族、五便加利種族、六マドラス種族是れなり身軀の上より論ずれば便加利種族は第五位に屬すれども前四種の民族は精神上未開に屬する人民にして恰かも麻尼羅ボルネオの土人の如し彼等の英國の陸軍に入籍し同胞を銃殺して自己の名譽となせり近來ヒルマを征伐したるは即ちコリス種族の先鋒ありしに依る當時英兵は手を拱きて何事をも爲さず洩しなりパンジャーブシークスの種族亦た已れの邦土を視ると糞土の如し決して語るに足らず知らるゝ如く印度教釋教緒意山那教の開祖に共に吾が地方より出でたるものにして曰はゞ吾が地方は世界文明の淵源あり去れば當地方の人民は

心性智巧にして能く印度全州將來の運命を擔ふの慨を有せり唯然むらくは人民貧弱にして爲さん術もなくラジャト、パブと稱するものゝ如きは進情に流れて國益を思はず一錢だも生産的に消費を試みたるとなし吾曹の心事察し玉はれと語る物語りに哀れを催ふせり  
余曰く貴下が今後印度民族統一上其方法に就て如何なる意見を有せらるゝや

氏曰く多々是れあらん然れども余が任の緒意山那教の宣布に在り曰く明日緩りと同教の教義を承らん曰く諾

翌日時を期して圖書館に至る同氏先づ在り揖して曰く貴下は曾て宗教の何たるを學びしことあるや曰く少しく之れあり氏即ち容を改めて曰く余と貴下を以て無宗教の人と爲さず宗教を是認する人と認むべし緒意山那教の神の存在を信するものなり然れども其の神たる一神の神にあらず多神の神にあらず亦た萬有神の神にあらず主なる緒意山那曰く宇宙偏滿の

大意識は時より時に人類の間に現はれ曾て斷絶の期あるべからず其の斷絶の期なきことと猶ほ萬有の理法が瞬間も怠たらず萬象を支配するに異ならず若し獨一の眞神其の子耶蘇を降して福音をイスラエルの民に殘したりとすも世界萬邦の民古今將來の人類を教ふるに充分なりとせず假令釋迦中天竺に降臨して八萬の徒弟を教へたりとするも東西南北他邦異邦の民を教ふるに充分なりとせず孔子の支那に於けるソクレエチスの希臘に於ける何れも一部の民を教へて普ねく宇内の民を教ふるに充分ならず吾々人類の靈魂をして無罪神聖ならしめん爲めに宇宙偏滿の大意識は古今上下常に此の人類間に下降せり耶蘇の如き釋迦の如き即ち此の大意識の爲めに感化を受けたるインカーチション(其の靈魂の神に近づきたる人類是れなり)たるに過ぎず故に今ま予が貴下に對して斯く説きつゝある間も大意識は萬有の理法とともに人類の間に下降しつゝあるなり理法の物を支配し大意識は心を支配す萬邦の民其の言語の異なるが爲め其の

インカーチションの異なるが爲め各々己の宗教を以て正なりと爲し其の宗教に依つてのみ救を得べしと爲せり然れども完全圓滿なる大意識の一の民を救ふて他の民を救はざるが如き差別的のものにあらず春去り夏來り秋往て冬至るが如く時と共に古今萬邦の民に向つて其の心性の教化を怠らず是れポイズニズムの大趣意なり主なる緒意山那又曰く人類のインカーチションに依て救を得べきものにあらず其心性を無罪ならしむるは唯だ大意識の感化を受くるに在り耶蘇も釋迦も悉く其の道を教へたる案内者のみ之れに従ふべく之れを敬すべし然れども之れに依りて救を求む可らず主なる緒意山那自ら曰く汝等の一人も吾れに依りて救はるべからず我の大意識に依て我自らを救ひたるが如く汝等も亦た人間以上の大意識に依りて汝等自らを救はざるべからず人間以上の大意識は愛すべくして懼るべきものにあらず神は吾々を救はんとは企つれども曾て之を罰せんと欲せしとなし罰の理法より來り救は神より來る

流辯滔々説き來りて氏即ち襟を正ふして曰く貴下ハ今ま緒意山那教を以て如何なる宗教と爲すか

予曰く予ハ未だ曾て天地を以て盲目無意識のものと認むると能はず深遠不可測暗々妖怪なる大塊と思ふなり殊に萬里漂泊の中氣を鬼にする間にも電光一閃心の底より悲しき思ひ現ハれ低回顧望の涙に暮るゝ事あり然れども吾れ佛教に依りて救を求めんか將た基督教に依て救を求めんか佛教基督教各派を分て其の歸する處を知らず去りて全く己れが心性を棄て、無宗教の人とならんか是れ苟くも學術に身を委ね靈魂不滅勢力保存の道理を知るものには力叶はざるとなり爰に宗教の爲めに思ひ煩ふと數年疑團結んで解けず今幸に緒意山那教の趣意を聞き吾が心全く開けたるを覺へり

予が語を聞て氏大に喜び是より日々同館に會じて緒意山那教の教義を聞くを得たり英領印度の統計家ハンマー氏ホイソニズムを評して曰く

緒意山那は一千四百八十五年便加利ナヂヤの村に生たり其系統ハ純粹なるプラミンの家に属せり氏は早く父を失ひ二十四歳に及で家を離れマスタ及びヂヤガンナースに行き印度教の神クリシヤナの崇拜者となり後ち氏は自家の説を建設し印度教の階級種族制度に反對し且つ宗教は儀式に依りて尊躰を拜すべきものに非ず唯神を愛し爾が内心を思念究案すべしと確定し遂に印度教を捨てたり氏ハ氏の隨從者に依てクリシヤナとラダー(凡人の意)の一身に結合したるものと信ぜられたり思ふに氏が説の純粹あると及び合理あるとの點に於てハ印度宗教改革者中氏は比較すべからざる位地に居れり去れバ氏が信仰ハ其没後非常の進歩を爲せり氏ハ生年四十八歳にして此世より消へ失せにけり

#### 印度の商業

印度の家屋は上等煉瓦中等土造下等竹造の三類あり煉瓦と云へば頗る壯麗の聞へあれども土人の煉瓦造ハ矮陋にして只積み上げたる迄あれバ土

造屋と異なる處なし前口は總て明け放しにして店の如きハ日本の店と同様なり元來日本の家屋ハ温帶地適合の建て方なれども其の店のみ純粹ある熱帶流儀を採りたるハ頗る怪しき次第なり印度の店は總て露店より發達したるものなれば前口を明け放し路頭に物品を陳列するは尤の次第なり獨り日本が之と同様の店を造りたるハ思ふに最初印度より其流儀を携へ來りしものならん

印度人が竹にて家を造るは頗る簡便にして納涼に適せリカルカッタにては竹造の内部に住居するなれども處に依りてハ竹にて棚を造り其の棚の上に住生活するもの多し竹造りの家は多く牛糞を以て壁を造るなり牛糞は其儘手を以て竹間に投ずるものなれハ總て指痕を露はし菊の花に似たり朝早くより無數の蒼蠅群集して此の壁に附着せり土人は此の牛糞をツカミたる指を以てカレーライスをツカミ食ふなり三本の指を以て食事を爲すとの印度人普通の儀式にして如何なる貴族もフォーク、ナイフを用ふる

とを知らざるなり

右の竹造りの家は何れも日本の裏店に同じく表て町は皆な土造なり店は寢間も居間も客室も倉庫も悉く之を兼ね客至れば小兒をして天井より釣下げたる風起しを動搖せしむると猶日本の夏時人を扇ぐに團扇を用ふるが如し店の流儀は不完全なれ共組織は稍形を具へ一町大抵同様の商賣を爲せり去れば甲の家にて買むざれば乙の家ハ顧客の必要と認むるものを陳列し足未だ乙の家に到らざる前に之を待てり乙の家之を賣る能ハざれば丙必ず之を賣り附けん企つ始めて至る者ハ土人の容貌總て同様なり人ハ殊に商業の上に於て團結集合を好みマーケットの如きバザアの如き其の盛んなると名状せべからず元來商業上の團結集合は自然の發達にして而も最も利益あるとなり此の點に於ては吾が日本の商業ハ支那人には勿論印度人にも亦た一步を譲らざるべからず

土人の商賣にも亦た競争行はれ小資本家が却つて大資本家を倒すと少なからず右の印度人の衣食住頗る低度なれば供給餘りありて需用少なき場合に於ては小資本家機を得て忽ち大資本家を破るなり唯に土人と土人との間に競争行はるゝのみならず土人と白人との間に競争行はれ白人常に失敗を取ると多し白人は衣食住の程度土人に比して非常に高ければ随ひて物品を賣るにも高價に賣らざるべからず土人は揚言して高きは白人易きは印度人なりと書き立て先づ白人を敗るの成算を有せり

去り乍ら諸君土人が易く賣りて白人と競争するの素は即ち彼等が富力を増進する能はざる所以にして毫も稱揚すべき事にあらず凡そ生活の易き處は必らず貧にして生活の難き處は必らず富なり生活の易きは即ち勞銀の低廉なる証左にして生活の難きは即ち勞銀の高價なる所以なり勞銀低ければ物價低くして金銭の價高く勞銀高ければ物價高くして金銭の價低し左れば生活の易き所は金銭の價高く生活の難き所は金銭の價低し

低きを以て高きを待つは猶ほ逸を以て勞を待つに等し印度人其の内地小資本の場合に於て白人と競争するを得べしと雖も海外大資本の場合に於ては山羊の象に對するに似たり

プラミンの一少年余に語りて曰く英人の商賣に長じたる人民にあらず彼れ等が長じたる處は斬り取り強盜是れなりと此語一概に擯斥すべからず元來商賣のみを以て國家を建設するの國あるや否やの古今未決の問題に屬せり英人はアメリカインヂャンを征服したるが故に合衆國の富を得オストラリヤンチーブを滅却したるが故に濠洲の富を得印度を亡ぼし埃及を掠せしが故に其の富力を吸ふを得たり苟くも英の商船が其の旗を翻す程の處へ悉く彈丸を以て奪ひ取りたる處にあらざるはなし腐儒事を知らず英人は商賣を以て國を立てたりと云へり其の見識の粗漏なると印度土人の一少年にも如かず嘗に英のみならず眞實商賣のみを以て國を建てたるもの曾て有るとなし唯だ猶太人と支那人の商賣を以て國を建てん

とす然れども彼等が擯斥の讀者の知る所なり予は商賈に身を委ねんとせ  
るものなれども此に此事を明言せざるを得ざるなり

### 印度貿易意見

印度貿易なる四文字の敢て今日に始まりしに非ざるべしと雖ども猶頗  
る耳新しき事に屬す余の余が經歷を述べて江湖諸彦の一考を煩はすべし  
始め南洋に出るや元來南洋との如何なる處なるか我が現實境温帯の地と  
は天壤の相異あれハ夢にも其の想像を畫かん由なし去り乍ら心竊かに南  
洋貿易は需用繁多供給莫大の好市場と信じ珊瑚眞珠の類は我が近海の漁  
獲と其數量を争ひ日用品の供給は幾千噸の漁船をして數日の中に品拂底  
に立ち至らしむる所ならんと預想したり然るに實地の見聞は此の希望を  
消して遂に南洋貿易組合の會員は各處に出張して實地を取調ぶべしと云  
ふとに一決せしむるに至れりサモアにてフィジー、トンガ、ソロモン、サンデ  
ー、サーズデー、ニューギニー諸群島の報告を蒐集し太平洋諸島最要の貿易品

の獨り椰子油のみなるとを發見し以上の椰子油は歐洲亞米利加及び濠斯  
太刺利亞の三大洲に莫大の販路を求め時價の高低殆んど豫め期すべから  
ざるものあるを知れりサモア、フィジーの同品は重もに濠洲に向けトンガ  
ソロモンの同品は重もにリスボンに向けカロリナ、マーシャル諸群島の  
同品は西班牙及荷蘭に向け遺利殆ど遺す所なし於是我南洋貿易組合は一  
旦其組合を解き井手氏サモアに止り菊池氏ニューギニー大島に船すると  
とし河越氏シドニーに行き余はメルボルンに行くべしと爲せり元來南洋  
貿易てふ熟語中の南洋なる二文字は頗る汎漫なる語にして一定の區域な  
し世人若し南洋貿易なる四文字を以て大平洋諸島間の貿易なりと爲さば  
大に誤れり依りて我が組合の南洋貿易の濠洲大陸との貿易を最終の目的  
となし序を以て大平洋諸島間に寄航するを最長の計と解釋したり我が組  
合は大略貿易品の上には佳なりの利益を攫取したるものなりと云へども  
市場狭小にして談ずるに足らず此の貿易の爲めに莫大の入費を捨てんに

ハ利をる處幸ふじて損する處を償ふを得べし今や郵船會社は其の航路を擴張して香港より麻尼羅に立寄り進でインドに至るの計畫組成れり是れ今後南洋貿易の爲め大に賀すべきとす去り乍ら此の航路ハ西南太平洋群島を経過するものにしあれバ讀者と謂はずして呂宋蘇門答刺ボルネオ爪哇の貿易如何に推思すべし諸君若し南洋貿易なる汎漫の語を區別して太平洋諸島貿易濠洲大陸貿易の二者に分け太平洋諸島貿易を區別して東南正南西南の三部に分け今まや旭日章の漁船が西南太平洋諸島の港頭に寄航せとの報を聞かば請ふ一轉して程近き印度貿易に着眼せよ始め余が濠洲メルボルンに至りし頃ハ印度に行くの考案ハなかりしなり然れども濠洲人民が好んで需用する處の米の多分ハパトナ米(一噸の相場大凡十五磅)ラングーン米(一噸の相場大凡二十磅)其の最多分を占むるを見し支那茶ハ市場より漸く放逐せられて印度茶大に勢力を占めカルカッタの一等町にアサム茶會社てふ偉大なる建築物あるとを發見し毎年夏季

に至れり十萬頭以上の濠洲馬を輸出するを知り英吉利印度航海會社の船ハポイント、デ、ゴール(錫蘭の港)に立寄りバタビヤ(爪哇)の港に立寄りマドラスに行きボンベイに行きカルカッタに行くことを知了せるに至りて宿霧始めて覺めたるが如き心地し濠洲印度の互に隣國なることを知りさてハ香港に來るべき豫定を一變して印度カルカッタに向ふに至れり去れば印度貿易は直に濠洲貿易と聯絡すべく西南太平洋群島貿易と合同すべし而して其の市場の廣大なると需用の廣きと供給の無限なると亦た眇爾たる太平洋二三群島の比にあらず請ふ江湖の有志者大に覺悟する處あれ

今日印度と日本との關係ハ一を賣りて五十を買ひ入るゝの計算なり一千八百八十八年の表に依れば日本より印度に輸出する總高凡そ三十萬ルビ(十五萬圓内)にして印度より日本に輸出せるもの殆んど一千五百萬ルビに垂んとす然れば吾々は亡國の民より常に五十倍の金錢を吸ひ取らる

の計算なり如何なる痛言激語を寫し來りて諸君の迷霧を撥破せんか余が此行の結果ハ實に此に在り數行の文字簡なるが如しと雖ども猶ほ多難多苦の中より絞り出したる報告に非るはなし況んや印度の物産中歐洲に輸出して精製の上歐洲品と爲し再び日本に輸出し來る者亦莫大の額に進めるに於てかや印度に於ける綿業の進歩は非常にして今や百〇五の綿糸製造場二百六十萬の錘數を有せるに至り日本へ輸出せる綿糸ハ一昨年二千三百萬封度に達したり且つ伊太利より日本に來る製皮ハ悉く印度より出でたるものにして皆な再輸出品に屬せり其他幾多の香料麻類同製品の如き亦英國の再輸出品に係れり之をしも看過し得べくんば日本の有志者亦た語るに足らず

加之日清貿易の熱必家は日本の海産物は清國のみが需用口の如く思ひ居れども焉んぞ知らん支那人ハ日本より買入れて多くヒルマの地方に輸出し莫大の利益を收め居とを鹽の如き鹽魚の如きベンガル及びヒルマ地方の需用莫大にして火器火藥絹製品の如き大印度至る處需用せざるハ悉く建築用材家具摺附木の如き又目前の利益少しとせず現今印度の輸出入高を一と見做せば日本の取引高ハ〇〇五即ち五毛に相當せり豈亦慨嘆の至りならずや

#### ヘスチングス珈琲館上の月東洋問題

此處はクライプ通のヘスチングス珈琲館なりクライプ氏の名は恰も加藤鬼將軍の名か朝鮮に響けるが如く五天竺に森き渡れり當カルカッタ市にはクライプ町と云ふもありクライプ通と云ふもありヘスチングス氏の名も同をくクライプ氏の名と共に稚兒も之を知らざるハなしクライプ、ヘスチングスの両氏は即ち此の天下の寶庫と聞たる大印度を奪ひ取りたる英の剛者なり然れ共二氏が事業の盛んなるに拘はらず土人虐待の故を以て世の非難を受けたるも恰かも亞非利加探檢者の一行が同じく土人虐待の故を以て世の攻撃を受ると等しき命運に落ちたるは奇と云ふべし英人は自國



人に對しては親切なれ共異種民族に對しては全く道德の範圍を離れて無  
 慘なる食人々種と變化し異種民族を滅却して其血を吸ふに非れば其の喝  
 を醫する能はざるものゝ如し今まクライブ通りのヘスチングス珈琲館と  
 聞かば英人に取りては勇壯の聞へあれ共志ある土人に取りては血醒き感  
 を起し居るとならん

ヘスチングス珈琲館にハ日本の紳士一人滞在し余と同室に在リカルカッ  
 ムに行くや否余の外に今一人の日本紳士ありとの事を聞て尋ねて見んと  
 の念を起し直に尋ねたるにベンチック町の旅館に在リしが後ち余と共に  
 當珈琲館に引き移りたり其の人ハ自ら號して儘よ狂一と云ひ商人には似  
 合はぬ磊落放膽の人なり

此頃の商用の爲め彼地此地を駈け廻り談商業の事に非れば必らず益にも  
 立たぬ故郷話しなり十一月六日の夜は予も故郷に發足すべしと決心して  
 手紙を投じたる翌日のことなれば用事も片付き日夜頗る閑を覺へたり時

にカルカッタ天上の月は高く珈琲館の園に懸り夜景頗る佳なり數瓶のシ  
 ンチヤイを傾け高閣に倚て快談す

余曰く此頃サマルカンドの邊りよりパレスマイン近國を旅行したる人の  
 話しを聞くに英雄大國の古跡何れも荒れ果て、道路荒廢馬車の通行甚だ  
 困難を感じ處々の丘陵刑林鬱蒼として物淋しき有様なるよし一興一敗は  
 免れぬ事とは言ひ乍ら同地方の住民が事物に冷淡にして古代の繁榮を想  
 望する心なきハ殘念なる次第なり

今まや暗海陸探檢の志四方に起り此の探檢の爲めには有志の奮發大方な  
 らず歐洲國民の意向は復た再び探檢の一事に向へんとぞ就中亞細亞大陸  
 探檢の一條ハ漸く歐洲先進者の口より現はれ東洋問題之に勢炎を加へ今  
 や歐洲の大評判とならんとす壞國の旅行家ハ見事に西藏の内地を横斷し  
 たるが其結果ハ壞國の朝廷に於て公にせらるべし思ふに今後亞細亞大陸  
 探檢の爲めにハゲインスマンに勝れる植物學者現はるべくスマンレーに

勝れる健足者現はるべし然れども以上の探検家と必らず亞細亞の住民より出ずして碧眼民族の中より起らん何者にもあれ一たびアサムの平原に出る、比馬拉亞連山脉の麓に夜營を試み直に北方西藏に入るものあらば是れぞ亞細亞の運命を支配するの國民たらん西藏は全世界無比の地利を占めたる寶土にして北の天山の險に依りて魯を防ぎ南は比馬拉亞の天壁に依りて英を防ぎ東には昆崙の山脉あり巴蜀の天險あり坐して天下を支配せし縁草繁りて烏雀枝上に飛び比馬拉亞の清風一點の露氣を帯びず大道坦々として緩歩に宜しからん汝若し其の直突勇進を怠らば彼れ碧眼民族は相携へて西藏に至り晝は日暖かなる處夜は月涼き處忽ち歐洲の文明を移し去らん奮へ日本人種汝が五十萬の朋友は毎年海外に向ふの命運を有せり汝先づ其親子兄弟あるを忘れ朋友愛妻あるを忘れ目を閉ぢ耳を閉ぢて汝が故郷の歡樂を捨てド―セ國家の運命を引き受けたるからん汝が一身あるを忘れ已れの魂魄已れの骸骨を埋むの必持にて一番激烈なる探

検に出掛けんか日本人種冷淡なりと雖も六十餘州響應せん人行かば須らく其處を擇ばざる可らず西藏の將來亞細亞帝國の首府なり先づ之れに入るもの之れが支配者たらん好し之れに入りて國民之を扶けず白骨を草上に横はらしむるも一快事のみ餘々として冷かなる生涯を爲すに百倍せり雙手を廣げて猛火炎中を横切るが如く兩手を舉げてナイヤガラの瀑布に飛び入るが如く須らく眞一文字に突き入るべし斯て亞細亞民族の悲運を吾が手裡に救ふを得ん今や時逼りて東洋問題頗る危しと放談に時を移し進んで東洋問題に入れる頃とカルカッタ天上の月の皓々として故郷の月と觀を同ふし曾て見たるぶらいとんの月と觀を同ふせり感慨胸に溢れて夜の三更に入れるを覺へざりき

深夜肅々としてカルカッタ市の内外亦た人影なくヘステングス珈琲館上の月沈々として山羊の悲鳴も今ハ跡を絶てり此の時聞るものハ……西藏……亞非汗斯丹……魯西亞……日本……などの語東洋二客の唇より出る

のみ——日本に在りて東洋問題と云へば其の縁も遠きが如く聞ゆれ共足  
 印度の地を踏み身亞細亞大陸の空氣に浴するに至て、其の感亦甚だ切な  
 り  
 大英果して久しく印度を領するの意あるや如何曰く否な英は一旦事ある  
 に臨んで、直に印度を捨て、東新嘉坡、香港に據り直に支那と聯合して魯  
 に當るの心算あり

凡そ英人の氣象と云へば其の地を領するや否先づ道路溝渠公園を修繕新  
 設し宛然アングロサクソン種族の生存に適合したる様に造りなると彼れ  
 等が常例なり余と同航したる一日耳、蔓人は同じくメルボルンより蘇門答  
 刺、フィリッピン、香港を経て日本に來りしが談偶英國の文明に及びしに  
 同人予に問を起して曰く貴下ハメルボルンのフィッロイ公園に遊びた  
 るとあるや曰く之れあり曰く貴下ハ如何に之を愛せしや曰く左迄の事な  
 かりし吾等は上野公園なる美園に目馴れ居れば外國に出で、如何なる公

園を見るも敢て感動を起せしとあし明らさまに云ハ、濠洲をどにてハ日  
 本人の目を喜ばしむべき山水の風景一も之れなし日耳蔓人曰く誠に然り  
 余は、フィッロイのハイド公園を知らざれどもメルボルンのフィッロイ公  
 園を見て實に英人の無風流なるに驚けり知らるゝ如く同公園の道路ハ悉  
 くセメントにて垣は悉く鐵柵なり彼等ハ風流とは何物か毫も之を知らず  
 實に血醒き人種の性質とて忌々しき公園を築きたるもの哉と巧に罵倒せ  
 り余曰く、フィッロイのハイド公園も其の通りなり然れ共是れ即ち英人特有  
 の文明にして能く英人の氣象を現はしたるものなり英人にして若し風流  
 を知り親愛を知り物の哀れを知らば英の文明は即ち破れん余は英人が常  
 例を知れり之を知りしが故にカルカッタに行ける前ハカルカッタを想像  
 して道路一直線溝渠清潔能く英人の生存に適當し居るならんと思ひしが  
 行て之を見るに至りて始めて驚けり彼等は中天竺の首府あるカルカッタ  
 市の道路を修築するの氣あく溝渠を疎通するの心なし土民ハ揚言して曰

へり何人も鳥を殺すものは印度の國法に照して之を罰せん何となれば鳥の日々吾等が捨つる汚穢物の掃除者たればなりと英人之れに和して曰く然り鳥の之を殺すべからず汝等は其の汚穢物を街上に捨て、可なり印度の鳥の吾等をして溝渠を疏通するの勞を省しめたりと斯くて其狹隘なると日本町の半分にも足らぬ街上に夥しき汚穢物……牛糞、馬糞、流し物、腐肉、死獸……何の嫌ひもなく之を捨てしめ恬として顧みず是れが英の領地と見れば驚歎すべき次第あり英の婦人は一種の潔癖を存せり少しく汚れたるものを見ても……こわい、恐ろしい、すさまじい……なんと云ふ語を使用し之を嫌ふと甚だし然るに英人此の婦人をしてカルカッタ街を通行せしめ何喰はぬ舂を爲せり是れ英人の氣質として有る間敷き次第なり英の唯に都府市村の經營に於て斯の如き放任主義を執るのみならず學事に於ても商業に於ても又宗教に於ても徹頭徹尾印度在來の主義を守らじめんと企てり知るべし英人が印度に向つて固守の意なく亞非汗斯丹の城門一

且破れなば駐在兵を東方に引き擧ぐるの心算あるとを

英が印度に重きを置くにせよ此地於て固守するの意なきは已に遠き昔しよりの事を見へたりカルカッタ市の中、英人が商賣上稍英國流儀の舂裁を具へたるものは指を屈して數ふべし一口に云は、英人は成るたけ土人より税を取り立て之を以て英の駐在兵を養ひ印度諸般の入費を支拂ひ且つ自國の利益を増進すれば足れりとなし能ふべき限り英人をしてカルカッタに永住せしめざらんと試み居るもの、如し英若し印度を固守するの意なくんば彼れは何れに於て其の利益を取返すの心算なるか曰く東支那と結托して北方ヒュマに本城を構へ進んで西藏に入り西、中央亞細亞伊犁の南方に出で、横さまに魯の勢力を挫かんとするに在り英が魯を防ぐの道唯此一あるのみ請ふ其理由を述べん

他は平和ありと歌ひ時は無事なりと稱し國家の存亡も民族の存滅も目下の急要通れる焦眉の問題も一口に排却し文字少しく外國の事に涉れば大

言放語なりとて漫に之を罵り自分獨りで事務家の如く心得天下の大局を知らぬが悲しさ世界の潮勢を見ぬが情け……語を替へて之を言ハ、其腦漿やさしく且つ單純にして六ヶ敷き事を考ふるが如何にも懶く椰子の實を喰ふて生活せる南洋の土蠻が世の中の事はうるさいと啣ち顔に石上に黙坐せるにさも似たる劣等の心情を携へて天下の事を論せんと試むるものあり這輩の前にて余が所謂東洋問題も筆漙りて進まず元來四五年以前より平和慈善と云ふ主義此の孤嶋を横行しさらぬだに氣の小さき日本人種をして愈々天下の局面に當るの勇氣を失せしめたり歐米に在りては既に二百年以前に枯死したる妄斷主義が今日本に於て其の勢力を得んとハ情けなき次第なり思ふに彼の平和慈善主義は早晚吾が日本を殘賦するところあらん

却說、東洋問題に立ち返り英國若し大印度を固守するの意なしとせば東洋の大局面一變せざらんとするも亦た得べからず今日此の機變を導くの原因は汲々として危く數々として逼れり魯西亞が西比亞利亞より南下して朝鮮に望むの計畫を爲せるもの一なり佛蘭西が魯と聯合して交趾支那より進で西、英のヒルマに於ける勢力を挫き北朝鮮に於ける魯の勢力と聯絡を結ぶの意あるもの二あり一旦亞非汗斯丹に事起らば佛ハポイント、オプシヤリンに據りて英國印度の海底電線を切斷し英の硝線を遮り魯をして北より下らしめ自ら南より進んで英を挟み撃たんとするの意ある三なり彼れ英人の漫に口實を構へて曰く英と孤嶋なり大陸に關係なしと焉んぞ知らん英は歐洲に關係なしとするも彼れは印度に於て其の重き關係を有せるを而して此の關係は宿年魯と結で解けず魯は英を防がん爲め佛と聯合するの必要あり佛は獨逸に復讐せんが爲に魯と聯合するの必要あり既に然らば英が印度を領せる間の歐洲と英國との關係は密なるが上にも密なるものなり彼等ハ揚言して自ら航海人民なり商業國民なりと云ふと雖ども彼等ハ曾て當り前の商賣を試みたるの覺なし

魯佛の二勢力の東洋問題の上にて英に向つては恐るべき強敵なり是に於てか英は支那と結托するの必要を生ぜり英にして一たび支那と秘密の契約を結ばんか東洋の平和是に於てか破れん

元來東洋問題を解釋するに其の危機を以て佛獨の平和相破るゝの時と爲す大なる誤なり東洋問題ハ殆んど佛獨の争を待たず獨歩單行して其危機を早め居れり英既にヒルマを占領したるからハ北の方西藏を望むは勿論の事なり是れ恰かも英が其の國旗を香港に迄翻し獨り日本海に其の占領權を延ばす能はざるを遺憾とし機を見て彼等が海上の權力を揮はんとすると同様なりされば今日西藏問題が歐洲の遠征社會に知られたる時に當り英が事あるに臨んで一旦印度を引き擧げ東新嘉坡香港に據り支那と聯結して徐ろに西藏に入らんとするの心算あるハ云ふ迄もなきとなり況んや魯西亞が西比利亞鐵道ハ單に浦潮斯德に來るの見込に非ずして同國陸軍の機密官は既に朝鮮の京城に鐵道ステーションを構へ陸軍の屯所を

置けるの地圖を製したるに於てをや東洋問題ハ斷じて歐洲戰亂の機を待つものに非ず寧ろ東洋問題先んて歐洲の戰亂は爲めに機を得る事あらんも知るべからざるなり

論じ去れば外交上の機密論交々吾が腦髓を刺撃し來るを覺ゆ然れどもヘスチングス珈琲館上の月は椰子葉間を降り時早五更に近ければ寝ぬも惡るしと儘よ狂一氏予諸共ソフアに掛りて其儘眠りに落ちぬ

### 歸 路

十一月七日シャーン洋船會社に行き香港行の切符を買ひ彼地此地を驅け廻り午後七時同會社のカッサン(吉生)號に乘組り同號ハ即ち支那洋船會社の持船にしてウインサン號が行く等なりしが航海日數の都合にて吉生號が行く事とされるあり翌日末明一人の白人余が船室に入れり是れは神戸在留の米人ハリ、ベッカーと云ふ印度通の商人にして新嘉坡に行く途中なり予も國を發足して以來日本の事情に通せぬ者のみの相手となり

日本の支那の一部あるか將た孤島なるか大陸なるか杯の質問に預り何時も苦々しく思ひ居りしが同氏の能く日本の事情に通ず日本の婦人を娶り幾多の淨瑠璃迄も能く解をるとを得るなり始め氏が余に面するや最と叮嚀なる面持にて何事か話し掛けたり其の語の予が曾て耳にせざりし所なれば予は答へて小生の印度語を知らず何卒英語にて話されたと云へば氏の微笑しながら又々何か分らぬ事を云へり押返して實はカルカッタに暫時滞留したるのみにて此近邊の語の少しも存せず貴下は英語國民の一人と見受たれば英語にて御話しを願ふと云へば氏は左も驚きたる跡にて小生の日本語を能くせり貴下が之を解せざるの不思議なりと云へり依て始て知れり氏が曩に何か話し掛たるは片言交りの日本語なりしを果ての雙方大笑となりしが右の破れ日本語を使用して余を苦しむるとも多かりし氏は予を呼でニースンと稱し深知博識なるニースン哉と驚けり朝起きればグイドモーニング、ニースン夜休めばグイドナイト、ニースン何事に

もニースンと呼べり依て余もニースンと呼ばるゝを最と嬉しき事に思へり之が東京にてニースンと呼ばれしならば打腸立たんに異人の日本語を話すを愛で、ニースンが美しき語となりたるも最と可笑し氏は元と米國陸軍の機密エンジニアを勤め後ちビルマ鐵道布設の爲めに雇れて同地に趣き上下ビルマを横行しビルマの事情に頗る悉し余もカルカッタに在りし時ビルマの近事を讀み殊にパゴダス地方の衰頽を知て慨然措く能はざりしが同氏に實地の話を聞き益する處少なからず同氏は埃及亞拉比亞印度地方何處ともなく小商して廻れり時々是れが人生と申すものなりと云ふ冷語の溢れたるを認めり氏の語る處に依れば日本の仕込杖をカルカッタに輸入し知らずして印度税則に觸れ厳しき検査を受け一枚の地圖の爲めに甚だしき嫌疑を受け獄屋に繋れたりしが日本の米國公使館に訴へて事濟みたる由總て英領印度への火藥武器の類は嚴禁なれば決して輸入すべからず實業家の爲めに一言を副へ置くなり

さて吉生號は八月一日全くアークティック河に滞りて一步も進行せず九日午前十時頃漸く動き始めたり此度の航海は最も面白く風波なければ曾て南太平洋の裏に激浪を凌ぎし時とは雲泥の相違なり十二月十五日夜無事にピートン港に着せり船のピートンに着するや甲板に出で、納涼し居りしが氏を上陸してピアを買ひ來るべしと云へりカルカッタを出で、より氏が所持せるシャンペーンもピアも昨日迄に牛の如く飲て悉く飲み盡したれば一日の間酒なくては凌ぎ難しと待ち兼ねて上陸せしなり夜十時頃に至れば船上の支那人も印度人も悉く上陸して一人も餘さず船中閑として聲なければ椅子に倚りたる儘眠りに落ちたり嗚呼萬里をさ迷ふ身にても夢あればこそ故郷の歡樂もいにし往事も吾が心に返へるなれ此の時夢魂の漂々としてサンイウイッチ嶋に至りカナカ人種が寄せ來る北太平洋の波にレレホアを歌ひ居るを見轉えてネビゲートア島に遊び椰子葉下石上の木槍土人がオレ、アローを戯れ居るを見直に南下してマオリ、達

斯馬尼亞の土人と相語らひ悲しき涙に吾れを忘れしがベッカー氏に呼び起されてピアの卓上に在るを知り起き直れば印度人が携へ來りたる二疋の山羊の小船に乗るを厭ひて陸近く悲鳴するを聞くのみ其晩ハ數瓶のピアを傾け盡し日本話に夜を明かしたり翌日船はピートンに滞在の筈なればベッカー氏先づ上陸し予は午後二時頃上陸したり彼南港は一見港に非ざるが如く見ゆるなり何時もの事ながら沖合より陸地を望む時と白聖樓樹林鬱蒼の間に聳へ風景佳なれば共行て之を見る時ハ左程にも清潔ならず端艇を五錢にて宜し外客と見れば土人等は不當の價を貪るが通例なれば先づ船に乗りて規則通りと五錢を與ふれば畏り居るなり余が旅行中物價勞力の最低なる處は即ち此の彼南港なり馬來人種とも片付かず印度のクリ種族とも片付かぬ舟子に導かれて直に上陸せりこの何くともなく駈け廻る身には到る處故郷ならざるはなく案内者も入らず朋友も不用なり恰かも已れが國に行き已れが家に歸るに



等し先づ陸に上りて左に行かんか右に行かんかと感ふ中一群の土人が白人を雑へて群り居るを見る何事かと其處に向へば嗚呼忘れもせぬ銀杏樹繁茂せる下小亭の下に二人の少年樂を奏せるにてありける一人はバイオリンを弾き一人は之れに和して歌へり音調悲涼にして余が腦を攪亂するとなしなからず讀者諸君此の境に在りての感覺は亦た格別のものなり今や余が身はピーナン港上炎日の輝く處に在り乍ら其心は忽ち東京銀座街瓦斯燈影暗き處に飛び轉じてシドニーのハイド公園に行き輾風美少年の紅頬を拂ふ處に至り又轉じてメルボルンのパーク町雨霏々として寒風吹き拂ふ處に移り即ち腦中一條の議論を擗成し最後に余が固有病なる民族興廢の事に及べり是れ即ち人類思想上の伴想の理に依れるなり

余は群集の土人に圍まれ思ひ煩ひつゝ頓て目を開けば少年は倦みたりと見へ歌を休みたるに一の少年はバイオリンを弾きつゝ何故歌へぬかと叱りたれば又もや苦しき聲を張り上げ異様奇妙なる歌を歌へり諸君此に聞

ふ所の少年は金毛緑眼の少年にも非ず將た緑髮花顔の少年にも非ず捲毛黒色の少年なり彼等の終日以上の歌を歌ひつゝ僅かの袖を乞ふなり  
 吁人生には如何なる道理の存在するものか銀座街頭商業の繁昌なる處一夜琴瑟の音を聞き何人か優しき音を弄し居るならんと就て之を見れば蓬髮垢面の少婦が饑へたる稚兒の乳房にすがるを抱きつゝ心にもあらぬ春雨を歌ひながら心斗りの袖を乞ふにぞありける咄何者の無情漢ぞ此の少婦の歌を聞て敢て歎樂を買へんとするか叱人生の怪しさよ汝が苦痛を訴ふる代りに何ぞ音樂の假音を弄せるかと必惑ふて解けず足早に走りたるに余が洋行以前の事なりきあじきなき浮世の若を訴ふる代はりに悲喜交至てふ音樂の假音を弄して人の耳を喜ばしむるは物の哀れを知る大和の人のみと心得居りしが布哇人のレレホアもサモア人のオレテイネも悉く人類が浮世の感漏れ者にあらざるはなかりきシドニーにてルックウーと云へる近邊の田舎に行かんものをとハイド公園の表町に至りトラム

を待ち居りしが幾多の淑女紳士が椅子に倚りて同々トラムを待ち居る前に一の美少年現われたり金毛日に輝きて肩に捲き緑眼潤大にして無罪婉優の意を示し短きズボンを穿ちて歩行頗るたしかに見へ何れの貴公子かと思まがう計りありしが左手にバイオリンを大切そうに抱きつかと一群の前に來り面を傾けバイオリンを頬に當て、弾き始めたり後ろなるウルムルの水も、咏め淺からぬハイド公園の千草も、綠草を吹き渡る輿風も、天然の光景悉く舞ひ來りて彼れが一曲の音樂に潜み入れるに似たり余が身も亦た一幅畫中の人の如く思われしが人生は何れも同じきものと三片の銀貨を投じたれば之れに應じて少年に二三片を與ふるもの少なからず少年は恭しく禮して立ち去れり此の時不圖銀坐街頭の彈琴者を思ひ起し世の道理ハ左も似たるものなるが亦た味の異なれるものと思へり後ちメルボルンに轉じ一夜寒風雨を交へ午後の十時過ぎ人通の稀れなる頃ホテルに歸りたるに門前に建琴を彈ずるもの二人あり彼れ等は其の大

なる建琴を負ひ歩き弾く時と一度く之を地上にふるすなり夜さむの晩なれば誰も顧みるものもなし余も其儘寢臺に横はりしが眠りに就く迄其の音を耳にしたり商業繁昌人文旺盛の都會にも亦其苦痛を訴るに音樂を以てするハ同々きとよと思へり後ちカルカッタに轉じ晝の炎熱を避けて夜中市内を歩行せるに蛇味線を弾くものあり山羊の悲鳴に左も似たる歌曲と相和し節々咽んで苦しく調々激して悲しきさま歸心切あらざるものも亦た聞くに堪へざらしめたり今己れの身ハピーナン港上に在りて少年の音樂を聞くに到る處の人生同一理の貫徹するありて余が腦髓中の感情部分に一條の線を書くに似たり蓋し音樂は人生の歡樂を發表せるの器に非ずして其哭泣の聲を發表するの具たるに過ぎず電氣燈青き下、舞踏會盛んなる時面白き音樂を聞くの人くは痛く余に反對すべけれ共余ハ其の表面を見て裏面を見る能はざるを憫むなり

ヘンリー・ジョー・イ氏が著したる進歩と困窮なる有名の書にフレイウン

夫人は書して曰く

二百五十八

オ、吾が兄弟よ君聞きしや稚兒泣きて止まず、  
年と伴ふ悲しみは那の處よりか来る？

母にすがりつ頭べを垂るゝ可愛き稚兒よ、

なでう涙だの乾るひまとてゝなき？

牧場に戯むる小羊の最と面白く見ゆ、

啼る小鳥の巢の中に餌を喜べり、

離れ日蔭に打ち集ひ、

蕾は日なたに向きて開く、

されど、オ、吾が兄弟よ小金の毛なす小供のみ、

余處の子共の遊ぶ時、

自由の國に育てられ、

苦しく泣きて止むひまもなし、

諸君、人生の苦痛を訴ふるに耳を喜ばしむる音楽を弄するは即ち此の悲境を詩に吟じたるが如し蓋し心なきの世間輕薄社會の常にして人の苦痛を聞きて快しとし人の失敗を聞きて悦ぶは萬邦同一と見へたり羅馬城を燒きたるニロ帝も儒者を坑殺したる始皇帝の心事も常に吾人の周圍に現くるゝなり行路難く行路甚だ難し諸君知らずやピ、ナン港上亡國の少年が哭泣を喜んで無心に行き過ぐる碧眼民族の將に此の例を他の諸民族に及ぼさんぞす港頭の孤客感に堪へず直ちに去りてピ、ナンの町に向へり  
ピ、ナン港にハ人力車あり車夫は總て支那人あり車ハ日本舊時の廢物を修覆したるものにて武藏坊辨慶岩見重太郎さんと云ふ鎧武者其の背面に踊れり此地の巡査は總て麻尼羅人にして身軀甚だ大ならず概して曰ハ、日本の巡査よりも小ある方なり二三町を歩行せる中炎熱に堪へざれば何れにか納涼せんと先づ大なる建築物に入り見るに中にハ閑として人なし先づ椅子に倚り水を呑みしが眠りを催したり後に目を覺し見れば既に半

時間を経たり最早用なしと又も市に出で、歩行せり三軒の西洋店あり多く日本の雜貨を貯へり郵便局電信局は建築狭小にして觀るに足らず唯移住民局の頗る廣大にして裏きに沖合より眺望せし時目立つて見へたるは即ち是れなり行くと四五町にして忽ち支那人の町に出でたり凡そ余が旅行したる英國の領地に於て支那人が勢力を有せるの地は新嘉坡香港に次いで此の地と此の地の支那町は商賣に依りて其區を分てり一町は全く鍛冶屋なれば次ぎの町の全く傘屋なり或る町の呉服屋を以て埋め立て或る町の魚屋を以て埋め立てり去ればピーナンにては何々町の名を與へずして何屋町と商賣の名を與ふるを便なりとす右の商賣自然の發達より來るものにして大坂東京に於ても亦其例なしとせずピーナンは人口十萬に餘り狹隘の港に夥しき支那人住居するとなれば従つて町の狹隘を感え諸營業の漸く街道に隘るゝに至れりカルカッタにて同地の商賣の露店より發達したるものなるを知りしが此の地の露店の全く人口多過

土地狹隘、レント高價の諸原因に依れるものにして始めて店を持ちし者も遂には露店に陥るに至りしなり語を替へて云はゞカルカッタとピーナンの同じく熱帯地には相違あけれ共店の發達の全く反對の方向に出でたり露店は千差萬別にして一々記載するに暇あらず植物には甘蔗パイナップル、西瓜、滿號密柑の類あり其の價は非常に廉價なり又處々に麥天、トコロ天、あんど云ふものを賣ると日本に異らず時としては飴を賣るものを見受け又うどんを賣るものを見受けたり

元來白人が經營せる大都會に於ては露店と云ふもの其の形を爲さず稀れに菓物を賣る者なしとせずされ共メルボルンの如きは同府の菓物商聯合して菓物の露店を禁止せんと請へり以上の大都會に在りて日本てふ美國を思ふ時は日本も同てく露店皆無の國の如く開ゆれ其實は日本程露店の夥しき國のなかるべし之をピーナンに比するに其の發達の度一層密なるを覺ゆ經濟上自然の有様とは云ひ乍ら錢位未滿の商賣が社會に多數を占

め料理屋茶屋に行くも時として幾圓の勘定に何錢若しくは何厘と云ふ端數を存し得々として恥とせざるが如きは文明國人の前に赤面至極の次第なり曾て布哇に留りし時聞きし一話あり米人一の日本人に尋ねて云く日本通貨の下位ハ幾許あるやと日本人遂に答ふる能はず布哇ハ五錢銀貨が下位にして恰かも日本の一厘に似たり今五錢の銀貨を下位と信じ居るものに向つて之れに對する五十分の一の通貨穴の明きたる一厘の價を説明せんとするハ恰かも一厘の五十分の一五絲と云ふ通貨國の貨幣を説明せんとするに似たり豈に思々しき限りならずや文明國に於ける食事ハ六ペンスを下位と爲せり然るに堂々たる東京の銀座に茶めし八厘と書き立て意氣揚々たるものありテチも是に於てか極まれりと云ふべし讀者請ふ日本人の生活は敢て支那人の上に非ざる所以を知得せよ噫此の生活を爲して身躰及び腦髓の精力を枯槁せしめ乍ら菜色を爲しつゝ天下の事を論ぜんと試むるものあり轉た笑止千萬の至りなり

ピーナンの産物はコブラ、麻布、砂糖、諸種の海産を重要な物品とす就中コブラ、砂糖の二者は産額非常にして殆んど當地の命脈を保ち居れり吉生號も夥しきコブラ及び甘蔗を積みたり右二品の集め場はピーナン港の處々に散在せり此日々本婦人の町を訪ふ心得なりしが日既に薄暮に及び船出の時間逼りたれば直ちに歸船したり

歸船して間もなく船ハ早や沖合に進み出でたりピーナンに來る前友トベツカー氏のピーナンの氣候に關して一事實を報道せり曰くピーナンを通行する毎に一度も雨に遇ハぬとてはなし激雨瀧の如く下りて暴風之に加はり印度洋中最も危険なるはピーナンの沖合なりと果せる哉ピーナンに來る前一日龍卷の程近く昇れるあり十五分の間消へ去らず汽船の若し之に觸るゝあらば飄として空中に擧げられさしもの大船も微塵に碎かんとその事なりしが數時を経て黒雲海面を掩ふて日昃を辨せず用意の間もなく大雨海を打ちて注ぎ來り物凄き日を送りたり港に着せる頃は一天纖雲

なく快く晴れ渡りてピーナンの見物も自由なりしが沖合に出でし時再び同様の大雨に遇へりピーナンより新嘉坡迄の僅かに二十四時間なれば船中別に記すべき事なしベッカー氏は…がピーナンに於ける日本婦人町に行かざるを遺憾とし謂ひて曰はく彼支那人が到る處を故郷として流離顛沛を事とせざるが如きは彼等が單純なる怠愆より起れる者なりと雖も日本婦人が此の熱國に來りて故郷の樂を捨つる所以の者は全く日本經濟の必迫より來るものなれば彼等の無罪なり純良なり唯惡むべきものは日本經濟の現状なりと余曰はく然り然れ共彼出稼日本婦人は日本の男子に物言ふを欲せず至極冷淡なれば彼等を訪はんも面白からず唯聞きたきとピーナン港中一人の日本男子も正業を營み居らざるやの一事なりと氏は曰はく儘かに記憶せざれども一人是れあるべしと蓋し文明國人の交際に慣れたる予が感覺を損せんを恐れ斯く辨解せしものにして其實は一百人の賤業婦人を除きては一人の男子も正當の業を營むものはなきなり世に惡

むべきものゝ經濟の道理あり古聖人教を垂れて曰はく父子轉溝壑兄弟妻子離散と是れ日本今日の現状を寫し出したるものならん十一月十七日新嘉坡に着す此の近傍の日本人の通行引きも切らざれば別に物の珍らしき報道もなし曾て聞きたる赤條々の土蠻が僅か一錢の銅貨を海中に投ずるに先を争ふて水を潜り巧みに之を取り上げ文明國育ちの繁華子に慰まれ恬として意に介せざるの様を目撃し哀れなる事よと思へり此夕ベッカー氏上陸し突然余の室に入り來り其儘にて上陸し玉のすやとの事なり何事かと親しき問柄なれば衣服も更めず薄暮上陸せしに一輛の馬車予等を待てりコハ有り難しと飛び乗れば洋裝したる日本婦人しとやかに中に坐せり流石の漂浪先生も意外の事に仰天し物言ふ術も失ひしが如何にあわてたりけん帽を脱して英語にて挨拶せしに婦人も同玄く英語にて返答せり後に心附きたるが愈々途方を失して黙々たりベッカー氏の夫人に打向ひ日本の紳士にて余が親友なれば日本語にて貴意を伺へ

すやと云へり然れども兩人の愈々黙せり車は進み始めたり予はベッカー氏が突然上陸せよと云ひ衣服を更ふるの閑も與へざりしを怨みたれば一座失笑して漸く打解けたり

濠斯太刺利亞より新嘉坡に来る迄は一切夢中にて少しも日本の事情を知らず此の婦人より始めて水害の事噴火の事虎列拉の事不作の事等逐一聞くを得實に驚き入りたり左る事と少しも知らず二十二年の下半季驚天動地の大繁昌ならんとまだ見もせぬ喜びに浮れつゝ歸路に就きたるこそ笑止なれ

馬車にて市中を隈なく巡覽しベッカー氏の知己ある佛人の家にて休息しベッカー夫婦に送られて歸船したり翌日吉生號解纜の筈ありしが十九日の夕に延引せしも再度上陸の機會を得ずして直ちに香港に向へり新嘉坡は印度支那及び西南諸島の中間に位せる要港にて英が之を領せるは其他の諸港に幾倍の力ありと云ふべし港灣は殆ど横須賀の如く頗る細

長にして容易に侵入し難き觀あり英の此の港に壯大なる砲臺及び城郭を構へ一旦事起らば據りて以て東洋問題を決するの燒點とあせり道路廣くして且つ平溝渠能く通りて又たカルカッタの比にあらず幾多の公園會堂學校ホテル其他市政に屬する公共の建築物費を并べて整列せり英が新嘉坡に重きを置ける是に於てか明かなりと云ふべし

十九日新嘉坡を解纜すベッカー氏の商用の爲め新嘉坡に止まり余一人となりたれば寂寥云はん方なし且つ海上激浪起り船舫の今にも覆るかと思ふと屢々なれば香港に来る迄殆んど甲板に出でず時々甲板に出づれば森然たる下等支那人の一群に接し感觸を悪しくせり二十七日無事香港に着す無數の宿引蟻の如く船舫に攀ぢ上れり日本人二人棧橋に立ち予を案内せり依りて日本宿安藤公平氏方に着し一年半振りにて先づ箸を取り日本食の膳に就きたる時は殆んど故郷に歸りたるの感を起せり

香港に着せし時は彼も此も繁雜にして觀察の暇なかりき況んや異種民族

雑沓の中に日本の生活を見聞し晩景に至て都々逸を耳にするが如き場合に當りてと一意愛郷の念に制せられ己れが民族の位置如何は頗る観察し難きものなり然れども苟くも記者たるもの此の念を排し泣かず怒らず笑はず悲しまず冰の如く其情を冷かにして批評を下さざるべからず

余が旅行せる各都府の日本人と大抵其の衣服を棄て言語を棄て其の宗教を棄て其の情緒を棄て一意歐洲の流儀を採用せんと汲々し中に外人の賞揚を得んとの念より酒を飲まず煙草を用ひず婦人に觸れずあらゆる人間の情慾を捨て、恰かも古代の仙人の如く瘦せ衰へて形容恰も餓へたる人の如き者あり余以爲らく是れ人種繁殖の道にあらずと即ち一年半の旅行には屢々在外日本人の生活が孤立頼る處なく甚だ望みあき有様に立ち至れる所以を論じ外人に忌避せられざる限りは其の國風を携へ行くを可とすと論をたり然るに今香港に來り見れば注文通り其の衣服其の住居其の食事淨瑠璃三味線都々逸より以て諸般の事に至る迄悉く之を採用し

如何にも愉快げに其生を送るを見たり是に於て一見此情態を呼で民種繁殖の道となし大に賛成の意を表すべき筈なれども予ハ事の意外に失望したり其の失望の甚しき亦た前説を確執するの勢なきに至れり

在香港の日本人は既に日本流儀の生活を探り恰かも故郷に在るが如く其の生を喜べり英國人が他國に行て自流の生活に満足せるが如く支那人が萬國に押し渡りて中國的生活を用ぬるが如く純粹なる日本流儀の生活に満足せり然る處其の實は彼等が二上り三下りを歌ひ淨瑠璃を耳にし踊を習ふ間に知らず、異種民族と日本民族との間に甚しき限界を附け已れハ支那家の三階若しくは四階に四五の家族相互に同居し米と魚とを食ふて其の生を送り向ふ三軒兩隣は高壯なる煉瓦造りに幾多の白人が完全無欠富榮豐饒なる生活を爲し居るを見て此れは日本人なるが故に斯の如く彼も外人なるが故に斯の如し馬なるが故に草を喰ひ犬なるが故に肉を喰ふと自らあきらめて之を羨む心もなければ之を追及する氣もなし去れ



バ彼れ等が満足心を毫も進歩の性質を帯びず如何に外人の下位に伏するも吾れハ日本人なるが故に斯の如しと論斷し去りて恬として顧みざるもの似たり蓋し彼等が斯の如き淺聞しき悲境に沈みたる所以のものは二箇の原因に依れり一ハ香港が在外日本娼妓の本案本元たる位地に在る是れなり二ハ無数の支那人が非常の侮辱を受けて毫も意に介せざるの有様を見聞するとは是れなり彼等香港の日本人を取り圍む者斯の如くにして能く歐米人種と競争對立の地位に進ましめんとするハ至難至艱の事共なり然れども彼等がなまじひ日本流の生活を丸取りにしたるもの亦た大なる一原因たらずんばあらざるなり

香港は東洋第一の互市場にして逐一之を論ぜんには月も亦た足らざるべし去れば香港の一問題は全く此に放棄し屢々是を訪ふ人の任に譲るべし

香港の町の甚だ狭し廣東は馬車を驅るの道なく無数の支那人は逐々蒸

々として往きつ來りつ殆んど歩行に苦しむ山なれ共香港ハ左程にもあらず家は總て三階以上にして一階毎に家族を異にし甚しきに至りてハ同去き部屋に二三の支那家族を合併したるもあり香港にハ興あり日本舊時の乗物に髣髴せり物價は或は低く或ハ高し散髪五十錢髻二十五錢珈琲二十五錢端艇四十錢なり菓實魚類は甚だ低く殆ど日本の相場よりも廉價なり二十八日日耳曼瀛船會社に往き日本横濱行の切符を買ひ其足にて公園に遊べり香港の道路ハ悉くセメントにして公園の道路も亦たセメントなり公園ハ頗る美麗なり元來香港なる港ハ斷崖絶壁の地を開きたるものにして手を立てたるが如き山の絶頂に至る迄悉く人家ならざるはあし去れば斯の如き絶壁の地に拓きたる公園なれば其の景色の佳るも勿論のとなり併し若し日本人をして此の絶壁の地に公園を築かしめんには坂道屈曲岩石崔嵬出入隠顯泉涌て川曲り草伏して喬木出づと云ふ風流の公園を造らんに英人の無風流ある恰も梯子の段の如く一區を削り來て之を平げ土

階に石段を附し又も一區を削り去りて平坦に爲せり然れども植物の植付方頗る行届き日本大學附屬の植物園の如く一々小札を附して其の何科に属する植物なるやを知らしめたり此公園には動物を養はず四五疋の獸類を儀式計りに具へたり噴泉の美麗なるは曾て見ざる所なり噴泉の左傍に前任大守の肖像を安置せり此の公園の頂上に上れば眼下に海岸を見下し後方に山の絶頂を見るなり此の絶頂へケーブル鐵道を布けり如何に神通を得たる孫悟空も此の爪も立たぬ絶壁にへよも上り得られまじ然るに科學上の利器に此の絶壁に多人數を引き上るなり是を望むに立てたる屏風に一條の白道を布きケーブル車は一直線に此の道を上るが如く見ゆ試みに此のケーブル車に乗れば恰かも天を仰で上るが如くシカと鐵棒を握り居るも猶ほ戰々として恐ろしく感ずと云ふ最も驚くは香港在留の英人が山の絶頂に別荘を置き日々此のケーブルに依りて往復すると是れなり彼等は無風流なれども其の經營の大膽なるとい寧ろ無風流より起れるものと謂はざるべからず

公園を下りて蜜柑を食ひ乍ら高壯の建築物に出でたり此の建築物は英兵の駐在所にして門吏其の入門を拒めり圖書館は何れなるかと尋ねたるに某町より某町に出で左行右折して又某町に行き玉へと云へり蓋し余が風躰の此の土地に馴れし者の如く見ゆるが爲めなるべし此の地にて蜜柑を賣るもの奇麗に其の皮を取りて與ふるなり丁寧なることを爲すもの哉と思へば彼等も其の蜜柑の皮を于して陳皮と稱する藥種とあし藥屋に賣るなり支那人の妄欲推して知るべし公園を下りて間もなく圖書館に飛び入り當日の新聞及び香港案内を一讀せり香港案内は四千ページに餘り西は亞丁港より東は横濱港に至る迄東洋諸國の商況は擧げて漏す處なし讀み去りて日本の條に來りしに五十ページ計り切り取りて去れるものあり日本人が爲せしか白人が爲せしか何れにしても不都合千萬の事なり明朝は發足の豫定なれば午後四時歸宿せり館主安藤氏に香港の統計を示す蓋

し香港在留の日本人の未だ精密なる香港の統計を聞きしことなきなり  
其の晩の香港の商況を視察せんと思ひ各商店を巡覽せり逐一論ぜんとせ  
の尙ほ數多の紙面を塞がざるを得ず唯驚くは幾多の支那商店に純粹なる  
日本品の店あり陶器中に一對百圓のもの雜然として横はれり之を自ら賣  
る事能はず支那人の手に委ね朝四暮三の生活を爲せる日本人の伎倆の程  
最と心外に思はれたり

十一月卅一日日耳曼メーブルに乗り込めり余等の仲間には日耳曼の男子(余  
と同室)日耳曼の婦人(隣室ありて互に日本語と獨逸語の學習を始めたりし  
が兎角喉に引き掛りたる如き發音に閉口せり日耳曼婦人の日本の紳士  
に結婚する爲め伯林より來れるありと云へり此の婦人の巧みにほれまし  
たの一語を嚙りハイとイーエを能くせり

十二月四日既に吾海岸に近づきたりと見へ西南諸嶋を手近く左右に眺め  
五日には全く大日本國の正南を通り同六日横濱に着せり此の朝は東

の乗り擧げたる朝にして海霧咫尺を辨せず駿河丸と先きになり後になり  
て進みしが其の危険言はん方なかりき同船したる學士の一群の喜悅滿面  
に溢れ儘かに之れが日本でしようか、とても間違はありますまい、愈々日本  
へ歸たのですな、などと繰り返し、打ち喜べり同氏等の談話に依れば香  
港に來りて日本食を試み胃病を起せしが其れでも猶ほ日本食をほしけれ  
今朝の船の食を試みざりしなりといへり余の全く反對にて如何にして今  
後日本食に立ち返らんかと憂ひたり香港にて僅に二日の間に余も同々く  
胃病を起したれば大に閉口したりさて船は錨を卸せり宿屋の迎人は何れ  
も周旋の事急がはし中にもグランドホテルの宿引の一隻の小蒸氣に乗來  
り船の進行中綱に攀ぢ上りて甲板に入り來れり彼等は宿を引かん爲め其  
の生命を惜まざるに似たりさて日本人五名日耳曼婦人一名端艇にて上陸  
せり醫學士の一切夢中にて舟子が日本語を解し得るは實に奇妙なり今迄  
一人の舟子も日本語を解したるものなかりしに日本國の忝さは舟子迄が

日本語を解し得るなりと打喜び殆んど氣も心も身に附かぬ有様なり然るに飄乎たる天竺浪人の今や日本の陸地を踏で露程も喜ばず吾が日本に來りたるの故郷に歸りたるに非ず天下は賣る處と買ふ處とあるのみ吾今日本と云ふ商賣國に來りたるはメルボルン、カルカッタよりも一層事情の知れたる外國に來りたるに過ぎず其の朋友故郷の愛情に陥りて寄る邊なき水の藻草の憂き旅地の苦を忘るゝ勿れと已れと已れの氣を勵まして上陸したるは午後三時なり見ればピーナン港に上陸したる時と同様日本の港には夥しき露店あり古下駄を賣るものランプの屑を買ふもの紙屑を拾ふもの煙管を掃除するもの煮豆を賣るもの餅を賣るもの曆を賣るもの殊に人力車のピーナンの比にあらず上陸后直に感じたるは日本今日の經濟なり日本人の利巧なるべしと雖も貧乏で致し方なし氣車にて東京に來りしが事の様子非常の變化にて國會は既に逐條議に移りたりとのと嗚呼時は過ぎ易きもの憂きものにバナ、ココ、ーナットを喰ふて條約改正の騒動を知

らす近くハゲイクトリヤ、ロールを食して撰擧騒ぎを夢中に送り今歸り來れば隔世の感あり永く讀者の清覽を煩はし多罪謝するの道をし謹んで擧筆す

明治廿四年三月八日印刷  
全 年 月 九 日 出 版



正價金三十五錢

著者兼  
發行者

三 嶋 一 雄

東京京橋區木挽町五丁目  
一番地寄留

印刷人

吉 田 榮 治

東京之橋區區築地二丁目九番地

發兌元

每 日 新 聞 社

東京之橋區尾張町新地七番地

大 賣 捌

經 濟 雜 誌 社

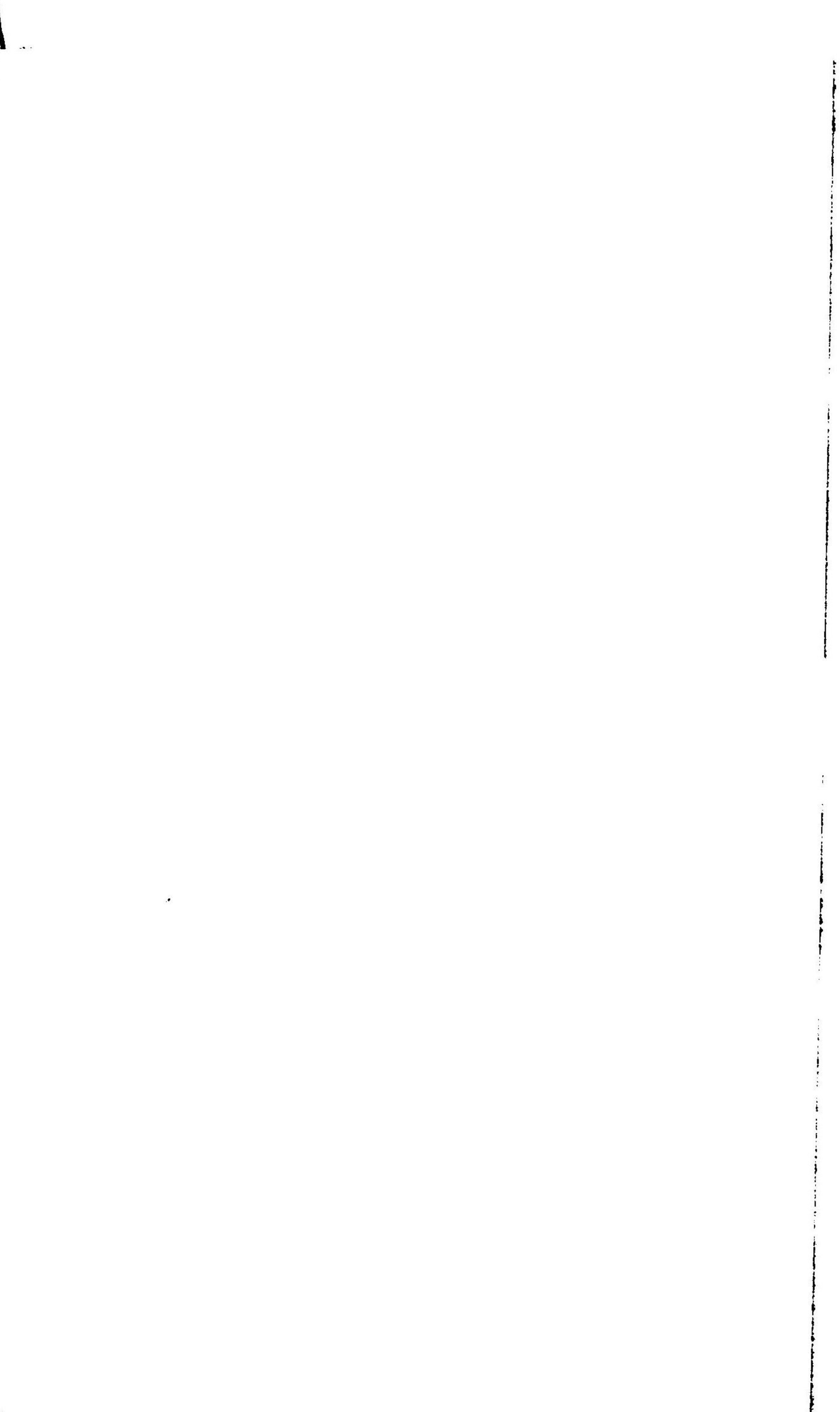
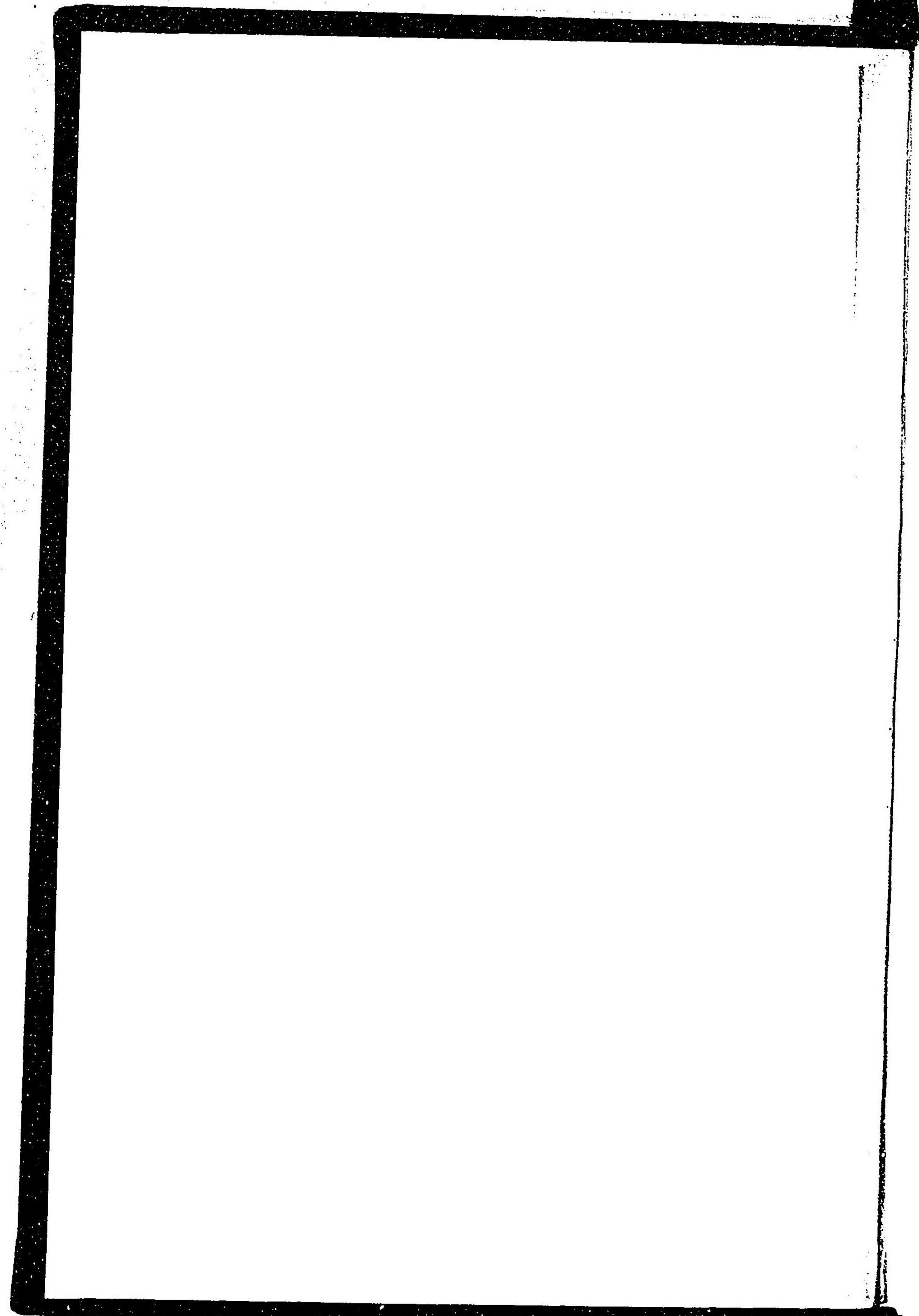
東京之橋區彌左工門町

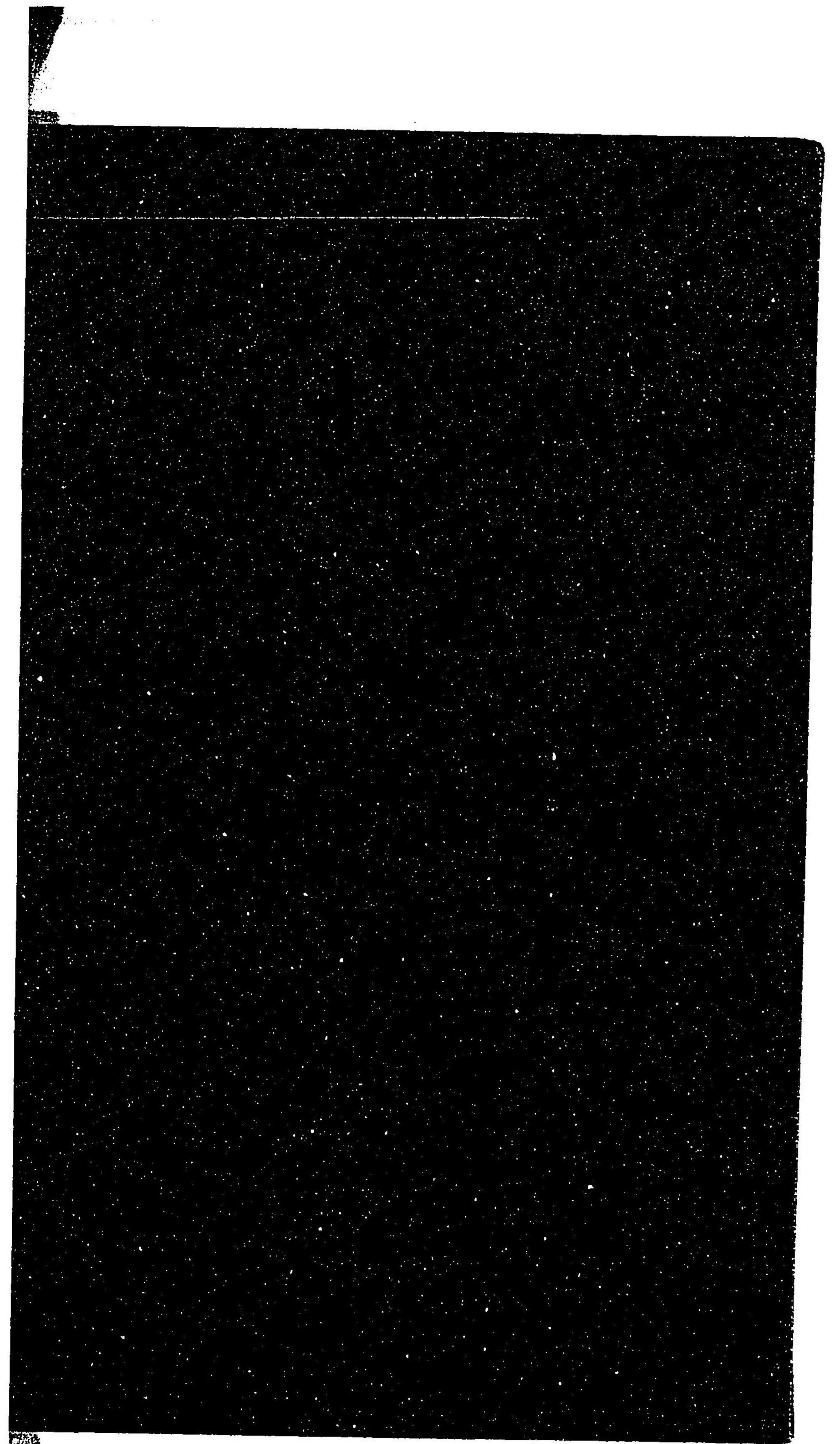
全

博 文 館

東京日本橋區本石町三丁目

219G17







31  
156

禁  
書

026982-000-7

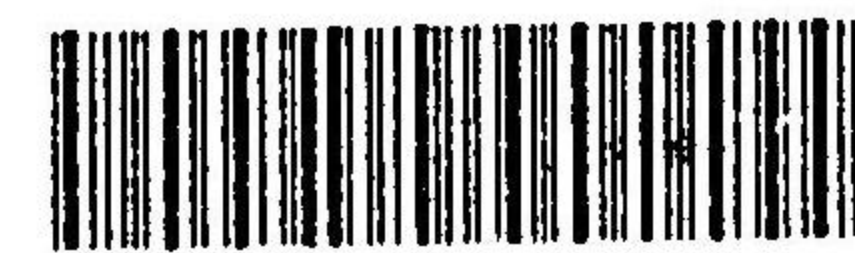
31-156

濠洲及印度

三島 一雄/著

M24

ADH-0002



Vertical line on the left side of the page.

